家庭雜誌

第五拾五號

他國の美を知るべし　寸も長き所あり尺も短き所あり

オルレアンの少女　見よ彼の終は落日の如し

花と蟲　造化の工驚くに足る

ローランド夫人とカンテー姉妹との交り　其濃やかなる同情を見るべし

おはなし　以て阿兄皆々の友とすべし

樂しき旅　山水相迎へ笑ふ

家庭必讀良書

日用百科全書

閑院宮妃智惠子殿下題字。
從一位近衛忠熙公題歌。
從三位前田利嗣侯題字。
前田侯爵夫人題歌。

（再版既成）

日用百科全書第壹編 和洋禮式

全壹册

正價金廿錢

郵税八錢

人生交際の道、禮を以て第一とす。本書は世に得易からざる幾多の珍書を參考し、専門師匠の校閲を請ひ、優麗なる圖を加へ、順序よき區別の下に、反覆丁寧に冠婚喪祭の禮法、言語、起居、衣服、應對、宴遊、獻酬の諸式より、上下、父子、夫婦、兄弟、親戚、知友等の諸作法まで、凡そ和洋の禮式一切を論述す。其題書、挿畫及び製本の優美なる、亦世間に類例少し、紳士貴女を始め、都鄙總ての家庭に各一本を藏せられなば、資益必ず多からん。

閑院宮殿下御肖像同宮妃殿下御肖像伊勢大廟出雲大社都下有名女學校〇寫眞版刷◎華村年方彩色畫挿入

毎月壹回發兌
美裝壹冊菊版
二百五十餘頁
正價◎壹冊金
貳拾錢◎拾貳
冊前金貳圓拾
五錢◎郵税一
冊ニ付六錢宛

從二位伯爵東久世通禧君題字。
貴族院議員渡邊驥君題詩。
正三位伯爵松浦詮君序文。
上杉義順君令夫人題歌。

（六月下旬發兌）

日用百科全書第貳編 茶の湯と生花

全壹册

正價金廿錢

郵税八錢

美人挿花及花壇の圖：鈴木華村彩色圖◎京美人煎茶、同抹茶、宇治茶摘、箱根早雲寺茶室の寫眞銅版口繪

この茶の湯と生花は、斯道の大家筆を執り、普く古今の書籍を參酌して、考證自在事理明瞭、一たび本書を讀む時は、何人と雖も師を求めずして、自ら奥義を窮むることを得べし。されば茶道の名家正三位松浦伯の序に「茶道は心のわざにして手の技にあらず、心法を得れば手自から道にかなふ」と云ひし如く、これには手の技より心の技に入るまでの徑程を順序よく叙述し、數百の繪畫を挿みたれば、手ほどき奥許しまで獨習するを得べし。生花の道又茶道と共に詳明精密にして、紳士淑女の好師範たるに羞ざるの珍書なり。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文舘

青年叢書第壹卷

武備教育

定價 拾貳錢
郵稅 貳錢

着眼『武裝したる日本』を造らんとの新制度を抱く、故に軍人のみならず全國民の普ねく兵事を知るの急を説く、皆兵主義は獨逸兵制の如く『短くして博く』を是れ主とし、日本今後の一種至適の立案を献ず。

畫策武備教育の内圍を大、中、小學とし、外圍を社會、家庭とす、故に舊來學校に於ける生兵法を一新し、故森文部の軍隊組織を改善し、大學、高等學校生徒の爲め特案を畫し、軍隊學校間の聯絡を促がす。
故に社會家庭には好摸型としてスパルタの名士リカーガスの制度を紹介す。

國防國防上の原理は萬古不易、故に原理以内日本に於る特種方畧を説き、日本の人口、歳入、地理の三大問題より割出す。

國是國民の政畧は國是を定め、國是は更に國防の主幹力を一定す、故に攻勢防禦の主幹力を論じ、西漸的大洋大陸方面に於る國是の遂行を促し、將來の政畧を『不可言不可語』の間に收む。

目次

軍國民
軍隊と學校との聯絡を開始せよ
日本の國是
軍人精神教育の大本
何をか武備教育と謂ふ
戰勝の社會及家庭
日本海軍小史
日本軍事
學校に於ける武備教育
國防の原理と日本國防策
日本陸軍小史
結論

本書は最近の統計に富み、間々兵事に老功ある某將軍の意見を挿入す。雄志遠畧を抱ける青年諸君取て劍下に繙け、

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

人見一太郎著

十二文豪 第九巻 ユーゴー

肖像入
紙數三百五十二頁
定價三十錢
郵税六錢

佛國文學の眞相を看よ、『ロマンチック』の本色を看よ、現實派の本源を看よ、十九世紀第一流の大詩人大小說家大劇曲家を看よ、大日本膨脹の風雲裏に化生したる雄大莊嚴なる新文學を看よ。

平田久著
十二文豪第一巻 **カーライル**
肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

竹越與三郎著
十二文豪第二巻 **マコウレー**
肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

山路彌吉著
十二文豪第三巻 **荻生徂來**
肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

宮崎八百吉著
十二文豪第四巻 **ヲルヅヲルス**
肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

高木伊作著
十二文豪第五巻 **ゲーテ**
肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

北村門太郎著
十二文豪第六巻 **エマルソン**
肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

塚越芳太郎著
十二文豪第七巻 **近松門左衛門**
肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

山路彌吉著
十二文豪第八巻 **新井白石**
肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

内田貢著
十二文豪號外 **ジヨンソン**
肖像入 定價二十錢 郵税四錢

發兌元
東京市京橋區日吉町四番地
民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵税共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰）一回ニ付金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 穎娃孝之助

編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿八年六月十日發行

家庭雜誌第五拾五號

目錄

社說

千利休……（永井鳳仙謡）……

他國の美をも知るべし……一

史談

オルレアンの少女……湖處子……二

科學

花と虫（二）……竹越竹代……六

文藝

ローラン夫人とカンチー姉妹……一一

その交り……鐵斧生……一二

おはなし……蘭芳……一四

樂しき旅（一）……藤島雪子……一七

想夫戀……筑峯女史……二四

初戀の記（二）……森愛軒……二六

家政

暑中の後園……三三

通俗天氣豫報……三四

病後病院……三六

手藝案內……三七

一種の縫取……三七

油屋さん……四〇

社交一斑……四一

流行の栞……春夢……四一

男女の夏衣……四二

流行の手提及銀貨入……四三

簾と扇子……四三

岐阜提灯……四四

幽禪染……四四

京、大阪、神戸及長崎の流行……四七

日用品物價……四八

雜錄

吾が海軍水兵の歌……國木田哲夫……四八

千利休……五〇

時事一斑

兩陛下の還御……五〇

西園寺文部大臣の教育意見武備教育……五〇

普通教育普及の度……五二

新智識配布の狀況……二五



（明治廿八年六月十日發兌）

社説

他國の美をも知るべし

支那人と戰つて勝ちたるが故に、日本は何事にても支那人より勝れりと思ふは愚かしき限り也。吾人は無心の兒童が『チャン／＼ぼうづは餘程ばかなもの』と街頭に歌ふを聞きて、私かに日本國民が此のばからしき自慢輕侮の念の奴隷ならざらんことを希ふこと切也。

支那人は戰鬪の術に於ては、我勇士に及ばざるは勿論なりと雖とも、其商賣に熱心にして、忍耐心につよき事、其の政府の恩惠のみを當てにせずして、萬事自治なる事、其大事に臨みては從容として迫らざる事、其の心膽の大にして、博きことは中々我國人の及ばざる事多し。吾人は彼等に勝つと共に、私かに彼等の長所をも見とめて油斷せず。翻つて我國人の短所と相比して、我が欠點を補ふこと肝要也。

例へば吾國人は彼が連戰連敗するを見て、極めて勇氣なしと見かぎると雖も、そは彼等に戰鬪の勇なきのみにして、全く勇氣なきものと云ふべからず。其證據には、彼等が死刑に處せられんとするや、號泣狂動して救を乞ふ樣は見ぐるしきまでなりと雖も、さて愈よ、刑場に引き出されて、號泣も、狂動も、命を救ふの術なしとあきらむるや、彼等の本性愈よ現れて、泰然として動かず、首さし出して刄をまつ其のけなげには、我邦人にも珍らしきほどなりと云ふ。此一事以て其勇氣なきにあらざるを知るべき也。故に古の名將は、之を死地に陷れて用ひ、大に功を奏したることある也。支那人の勇氣は、我邦人の輕ずる所なりと雖も、全く

なきにあらざる事此の如し。其他忍耐して以て終を待つの心、世界を我舞臺とするの大なる膽玉の如きは、我國人のさかさに立つとも及ばざる事也。

我國は兎角、島國の舊弊を免れず、膽玉と云へば刀、劍を振りまはし盜賊壯士を恐れざる位を膽玉と心得るなれども大なる誤也。此かることとは、誰にてもなし得べし、ゆめ〳〵己の國のみをゑらしと思はず、支那人の長所をも識認すべき事也。

此頃西園寺文部大臣の演説にも、大和魂のみを口にして、他國の美をしらざるは善き事にあらずと云はれたるは、此邊の事なるべし。



史談

オルレアンの少女

湖處子

オルレアンの圍解けたりしかは、少女は國王加冠の式に向ひて急きたりき。彼は今讃美の海の中にあり、身崇拜の目的たる時にも、心は常に田園にあり、夢は父母の疎屋を繞りき。彼か故郷を懷ふの心は、何物をも之を移すこと能はさりき。彼かレイムに急く所以は、卽ちトムレミー(故鄕)に急く所以なりけり。

オルレアンよりチャールス卽位の目的地たるレイムに達するまてには、猶ほ沿道の敵兵の打ち拂ふへきものありしか、王の將校等は恰かもヂャンか意を解して、之を迎ふるもの丶如く均しく道を淸むることに力を恊せたり。是に於てヂャンも亦其の困難なる處に身を顯はし

て聲援せしかばさしもに頑硬なりし英軍も、宛かも積雪の春陽を待つて退く如く、レイム以外數里の地、亦た敵の隻影を留めさるに至りしかは、チャールス六世は一萬騎の隊伍の頭として、チャンに扈從せられてレイムに向ひぬ。

沿道より馳せ加はる勤王軍即位式を見んとて千村萬落より出て來る庶民、雲霞の如くうち集ひ、レイムの市街は僅かに人の裡に見出さるゝはかりなりき。斯て定められたる時に於て、加冠の式はノートルダムの寺院に於て執り行はれ、其式の終る間、チャンは手に其旗を執つて聖壇に侍したり。式終り、堂上堂下一齊にフランスの王萬歳を唱ふるや。少女は喜ひ悲しみ交ゝ至り身をチャールスの足下に投し、「妾は卑しき賤の女なり」と、涙は泉の如くなりき。

兩の使命、兩なから果されたり。今は思ひ置くとなかりき。少女の歸心は矢の如くなりき。是より先き、彼はレイムに來る途上に於て、己を迎へ見る生みの父母と、懷かしき叔父とを、人群の裡に認めしかば、涕泗自から禁する能はさりき。彼か事終れる今は、父母の顔、叔父の手容、舊主を歡ひ迎ふへき牛羊、家庭の快樂、田園の生活、連鎖をなして彼か心眼に浮ひ來りぬ。彼は今一刻も他鄕に止まる心なかりき。然れとも不幸にして彼はオルレアンスの救ひ人なりき。一國の安危は猶ほ懸りて彼の肩にありき。彼在れは佛王の眠食安く、彼無けれは佛王心を安んせさりしかは、名譽、榮光身に加へられし凡ての勳章、之を棄つると土塊の如くなるも、チャールスの懇請を拒む能はす、涙を飲むて王の留むるに從ひぬ。

以後の事、復た口にするに忍ひす。何となれは彼か終は屠らるゝ犧牲の如くなれはなり。彼は既に其天力の使命と共に盡きたるを知る。王及ひ王の將校も亦屢彼の言を聽けり。然も猶ほ彼を信して彼を戰場に餘儀なく

せり。彼は身の既に爲すなきを知ると雖、人の言を峻拒すると能はさる彼は、憐むへし猶ほ前日の天祐を懷ひて萬一を僥倖せんとせり。

今や佛王は勢に乘して巴理に殉へ、佛軍の氣數十里の外に振ふ。ヂャンが力は最早勝に狃れて暴ふる兵士を制する能はす、彼は又屢戰ひて屢敗れ身も亦數傷を被ふれり。嫉妬を以て默したりし將校等、亦次第に彼に向つて聲を擧けたり。ある戰に於て、彼は大に敗衂し、其の夥しく失はれし兵卒の、收葬するに遑なく、堆積されて焚かれしを見、甚たしく胸を搏たれ、猶ほ斯く武器を執るとの、天に對する反罪なるを思ひ、速かに其甲冑佩刀を返して、歸國すへきとを乞ひぬ。然れとも猶ほ王と將校の聽かさりしとは、ヂャンはしも天を仰いて嘆息し、今はとて身を運命のまゝに任せぬ。

余をして其終に急かしめよ。彼は間もなく英軍に捕はれたり。此一婦人を捕へ得たる時、英軍の歡呼は恰も歐羅巴を擧けたらんほとの勢なりき。然して佛人の絶望は、フランスを失ひたらんよりも甚たしかりき。

古も今も人相同し、ヂャンの審判の如何にクリストの審判に似たるかを見よ。彼は唯一俘虜のみ。殺すべくんは殺すへく、活すへくんは活すへし。然して醜獰なる英國教會の嫉妬は、必す彼を妖婦の名を以て論し、必す彼を蠱惑の罪に陷れんとを欲したり。是に於て彼は僧侶の手に渡されぬ。佛人にして英人の歡心を買ふに汲々たるヒューヴェイの監督、自ら裁判長の位地を取り、彼を論するに其の神法に反して男子の服裝したる事、多數の人を殺戮せし事、及び神の使ひ女なりと稱して、民を蠱惑したる事を以てす。

ヂャンは憚るとなく答へて曰く、「我は人を殺傷せさらん爲め、槍の代りに旗を執れり。我は一兵をも傷けしとなし。其他は皆異象に於ける神託に從へるのみ」と。渠等は謂ゆる異象なるものを問ひ、之に就て多くを鞠

したるも、一も得る所なかりき。心躁れるビューヴェエーの監督は、躍りあがつて問ひけらく、「汝は神の恩寵の中にありと思ふや」と、斯る妄りなる詰問に對しては、同席の僧侶すらも爪彈するものありき。ヂヤンは徐ろに答へて曰く、「是は大なる難題なり、誰か能く斯の如き問に答ふるものあらん。我若し神の恩寵の中にあらされは其中にあらんとを祈らんのみ。若し神恩の中にあらは、離れさらんとを祈らんのみ。」と此明快なる答に出遇ひて、監督は忽ち語を變へたり、「汝か異象に於て、聖者は英國を悪めるや」ヂヤン之に對へて曰く、「渠等は神の愛し玉ふ所を愛し、神の悪み玉ふ所を憎む」監督は如何にもしてヂヤンを其言葉によつて陷しいれんと、猶ほ推して問へり、「然らは神は英國を悪み玉ふや」我は神の英を憎み玉ふや否とを知らす。唯英人にして戰塲に斃れさるものの、必すフランスの外に逐はるへきを知るのみ」と。

「彼を燒け」「彼を燒け」是れ彼の罪なきに刺激されたる僧侶と、怒り狂ふ兵卒の叫ひなりき。是に於て斷案なき死刑は宣告せられ、「悪魔に見入れられしもの」てふ榜標は書れぬ。ヂヤンは未た嘗て聞かさる火刑の宣告を受くるや、恐怖の餘り、衣を裂き、髪を引き亂しても狂ひぬ。然れとも漸くにして感覺を回復し、平靜なる態度を以て此の恐るへき公刑を迎へぬ。時迫つきけれは、渠等は彼を定めたる塲所に曳き出し、其中のあるものをして、ヂヤンに最後の説敎を聽かしめぬ。ヂヤンは涕ふきつゝ、聽問したるか、説敎の了るやかて十字架を求めぬ。傍らに立てる兵卒、其棒をうち折つて投け與へぬ。彼は之を取りあけて十字に組み、あまた度之に唇をあて然る後懷にかき抱きぬ。其時説敎師はヂヤンに向ひて宣告すらく、「安らかに世を去るへし、敎會は汝を神に渡す」と。嗟乎其靈魂を悪魔に渡す能はすんは、

其身を殺すとも渠等に何の益かあらん。渠等は斯くして天と人の前に自個の嫉妬の業を滿せるのみ。

彼は今跪きてクリストを呼び、熖けるばかりの熱誠なる祈禱をさゝげ、凡て是まで犯し來りし罪の容を請ひ凡て己に罪を犯したるものを容さんとを神に告げ、猶ほ傍觀者の已の爲に禱らんとを冀ひ、然して後身を起して刑場に向ひぬ。刑場を繞る山の如き傍觀者は一人として面を掩はざるものなし、彼を詛ひし僧侶の中、身を彼の足下に投じて其宥恕を請ふものすらあるに至れり。然れども其他の僧侶と兵卒とは、終まで殘忍なりき。

火は爆れり。萬を以て數ふる看者は、無言に、併しながら一齊に神を叫びぬ。彼等が心を合せたる禱も、遂に嫉妬と怒の火を消す能はず、天より來りし愛國の雄魂は、焰の中に天に歸りぬ。嗟呼世を救はんとして却て世に詛ひ懸けられしクリストの最後の後、斯の如く慘憺たる然して光榮なる最後を有するもの、幾人かあるや。

渠等は神の使ひ女を燒きて快心し、然して悔恨せり。渠等は最も大なる敵を失ひ、然して沮喪しぬ。渠等が妖婦として、亡ぼしたる少女の豫言は渠等に成れり、渠等は其不義の侵地を棄てゝ空しく己の國に引去らざるを得ざりき。生きてオルレアンを救ひし少女は、其死するに由つてフランスを救へり。不朽なる哉オルレアンの少女。

(完)

科學

花と虫(二)

竹越竹代

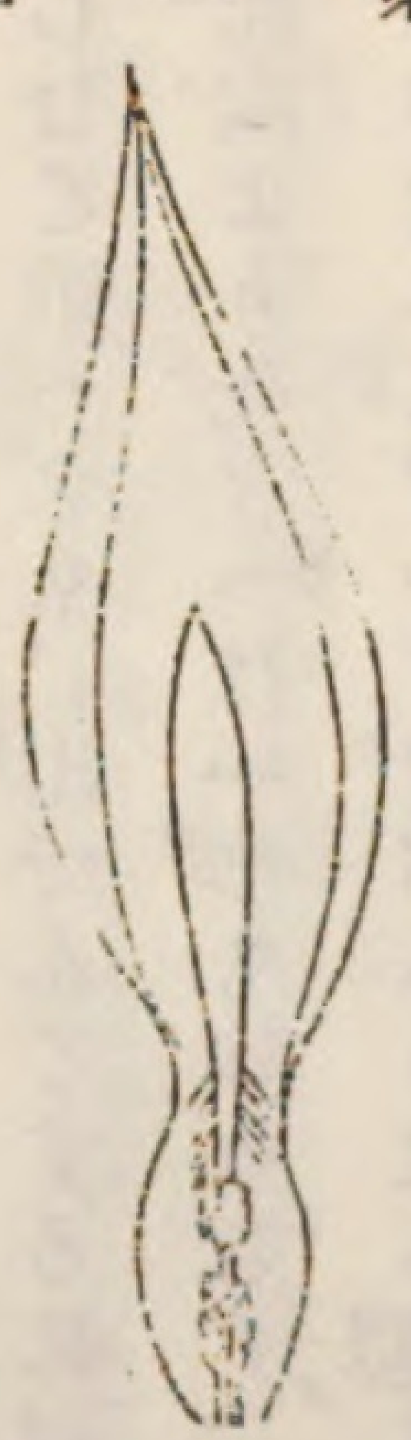
知る人は已でに能く知り給ふなるべし、凡べての花は花冠と云へる、通常美つくしき色を持てる花の瓣と、

花蕚とてその花瓣を支ゆる、云はゞ葉にも似たるかと思わるゝものと、雄雌蕊との四色の道具あり。元とより多くの種類の花の中には、例外に立つものもあり、又た仝し花冠と云へども管の如とくなりたるもの、幾何ともなく別れたるもの、一とつにつゞきたるもの等の別ありて、一と口には云ひ難たけれども、先づ以上の四種の道具立は、通常のものと見て大差なかるべし。

開らきて人に愛せられ、萎ぼみて人に惜しまれ、散しては人に忌まるゝ花は、何にがために開らき、何にがために散ずるやと云ふことは、少こしく研究の價値あるべし。

通常人々の見て美るわしと賞する花の色は、花冠の有する所にして、その花冠の眞中に羣列せる雄蕊に圍こまれたるを雌蕊とす。椿や、梅や、櫻の如とく花粉の澤山なる雄蕊が、丁寧に雌を取り圍こみ、その花粉が鳥渡能く雌蕊の上に振りかゝる樣になりをる花は、風の力も、鳥の力も、虫の力も藉らずして、獨力にて結果することを得ると雖へども、多くの花の中には其の幸ひを味じわゝさるもの少けなからず、第一類は雄蕊と雌蕊とが仝一の花の中になくして、雄花と雌花と枝の彼處此處に散在する者あり、それはまだしもよけれども雄木と雌木と全く木を別にせる者あり。又た雌雄の花共もに一本の木には備なわれども、雄花は先きに開らきて、もはや萎ぼみし後にて、漸やく雌花の開らくあり。雄蕊の位地甚だ不便なる所にありて、花粉の雌蕊にかゝらざるもの等、千差万別にして獨力にて結果し得るものは多くはあらず。

第一圖



第一圖に示めせるは天南星科の植物なるが間暇ありて精細にその花の仕

組と虫の關係とを眺がむるとは、中々面もしろき仕事なるべし。此の花を素人が一目するときは、獨力にて結果するに、之れより容すきはなき樣なり。そは花冠は圖に示めせるが如とく、灯燈の如とくに、上の方にて細ぼまりたるが故へに、雨や風のために空なしく吹き去らるゝの恐れなく、又た(イ)が雄蕊にして(ロ)が柱頭なるが故へに、花粉は自然に柱頭の上に振りかゝるべく思もはるれども、意外なる妨またげは、その結果を自然に成就せしめざるなり。そは下なる雌蕊は、雄蕊の未だ若かくして、花粉を散布せざる中に、已でに早やくも成熟して、雄蕊の熟する頃ろは、もはや枯死し終われる後なるが故へに、自分の花粉にては幾年を經るも、決して結果することはあらず。然かるに都合よくも亦た面白ろき一事あり。即ち圖中(ニ)は細そき毛にして、雄雌蕊の上に下をむきて生じたるが、蠅は花の中に蜜を尋づねつゝ、それとも知らで入り込むに、下に向ひたる毛は、入るときこそ何の妨げも爲さで入らしむと雖へども、出でんとするには、全く之に反して、此處より先きへは一歩もゆるさず、全く出門を禁制するが故へに、一と度び入りたる蠅は、再び出づることを得ず。かくて仕方のなきがまに〳〵、牢の中に安居して、中にある蜜を食料とし、夜中降だれる露を飮みつゝ、おぼつかなくも數日の生命を保もちつゝある中に、長だち後くれたる雄蕊は、漸やくに熟くし、擔ぎたる花粉は、ばら〳〵と散じ始じめて、蠅はために全身粉だらけとなる、此の時上を眺むれば數日間屋根と頂きつゝ雨露をしのぎたる門戶の毛は、花粉の散じたる後は、もはや余の役は終われりと云わん計かりに、勢も失せ、精も無くなり、又たばら〳〵萎ほれ去れり。蠅は九死の中に一生を得、夢かうつゝかと疑たがひつゝ、試みに數日間たゝみたる羽をはゞたきしつゝ、日光を目がけて飛び見るに、こは不思議、昨日迄でとて

も出づるを得ざるとと、あきらめて、天命を茲に終へんものと覺悟せし牢屋の口は、何の造作もなく安すゝゝと通行出來、再び天日を見るのうれしき身とはなれり。賢しこき動物ならば、もはやこれにこり〳〵して、再たゝびこの類の花には蜜を尋づねざるべきも、元來愚鈍なる性ゆへに、今の今まで困るゝみたるとは、天日を見ると同時に忘すれはて、出づるや否なや又た他の同種類の花に入る。入りたる花先きのものより一歩を後くれて生長したるものにして、雌蕊は今が盛かりの時にして、蠅の負ひ來たりたる花粉を受くるには、最も屈強の時なれば、蠅の不幸は花の僥倖となりて、玆に始じめて結果し得るに至たる。數日入牢したる蠅は、こりもせで又た出でゝ、次ぎの若かき花に入り、順を逐ひて結果の媒介を爲す、實に奇妙不思議と云ふべき仕組也。

第二圖に示めせるは、誰れも知れる石竹なるが、第三





第三圖

圖と見くらぶるときは、同じ一つの花にはあらざる樣に見ゆべし。そは二圖の花は五本の蕊を有すれども、三圖は二本にして、しかも全くその形躰の異なりたるものを見るべし。されどもこは決して別種なる花にあらず。二圖は石竹の開らきたる當座即ち未だその若か花にして、雄蕊のみの成長したる所、なるがその同じき花が數日を經過する中に、雄蕊は凋れて萎ぼみ去り、第三圖の如とき雌蕊漸次に成長するに至たる。此のとき幸ひにも虫ありて、他の若か花より花粉を被

ふむり來たりて、雌蕊の上に振りかくるものに遇はゞ、始じめて石竹の種子を得る也。此の類の花は尙ほ多くある中にも少しく風の變わりだるものは『我を忘れな』に付きて見るべし。此の花は秋の初じめ何づれの野邊にも多く咲き出づる小さき花にして、花の形も色も一寸桔梗の如とくなるが、恰だかも紫蘇の實の如とく、一本の幹にぶつ〳〵と着きて、大さも亦たほゞ其の實の大の如とし。かく少さき花と雖ども之に付きて精細にしらぶるときは、各々雌雄の蕊を備へ完全なる一個の花也。此の花初じめの程とは、第四圖の如とく雌蕊は雄蕊の下たにあれども、漸やく長ずるに隨たがひ、第五圖の如とく雄蕊遙るかに下たとなる。故へに

第四圖



第五圖



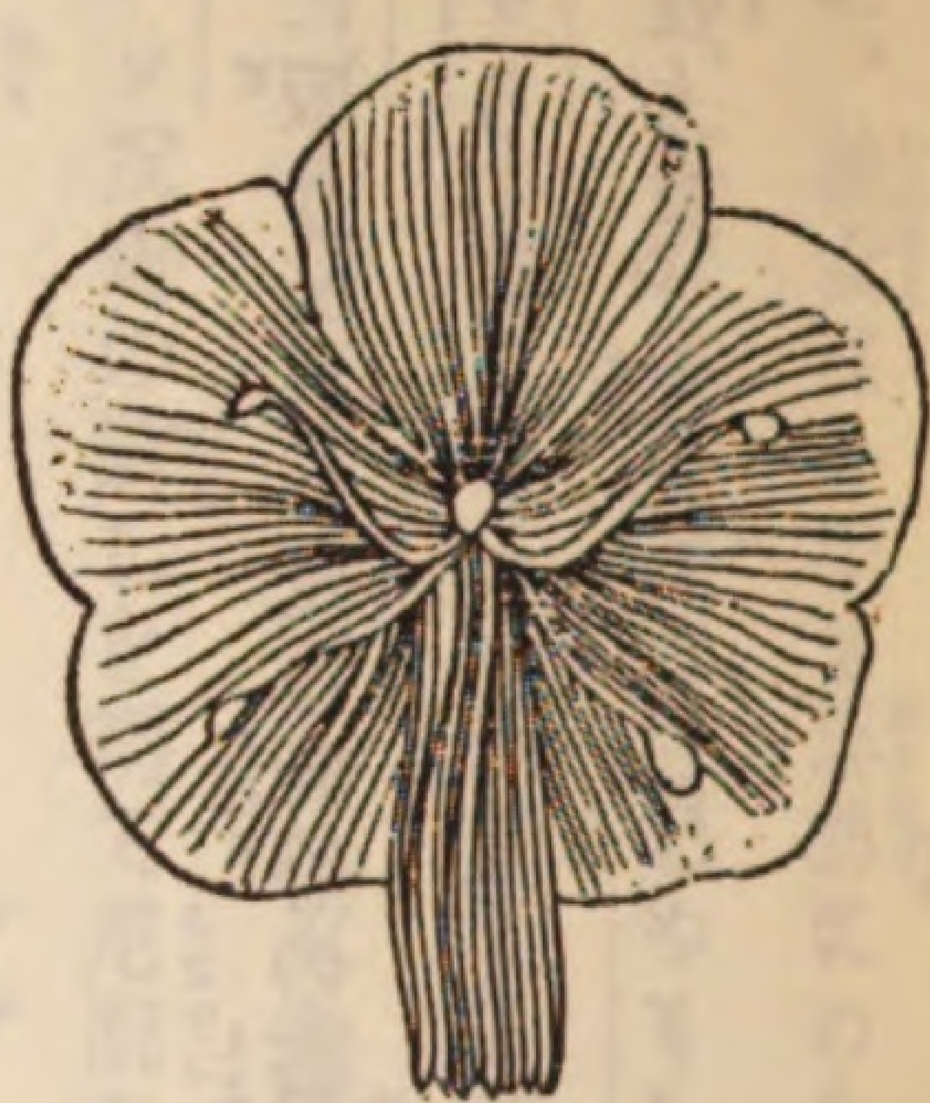
その花粉を柱頭に注ぐには、近かきながらも、他物の紹介によらざるべからず。ビラニヤムと云ふ草あり。我が國の鋸草に似たる少さき花にして、葉は非常に善き香氣あり何つれの花園にも多く培養する所なり。此の花も自己にて結果し能わざる類の一なるが、その不結果の元因をしらぶるときは、實つに求とめて結果せざるが如とき、ばからしきものあり。第六圖は其の全躰を示めせるものにして七八圖は花の變化の樣まを顯らわせる也。初じめて花の開らくや、雄蕊は花瓣にぴたりと引つ付きて、雌蕊のみ上に立ちたるが暫

第六圖

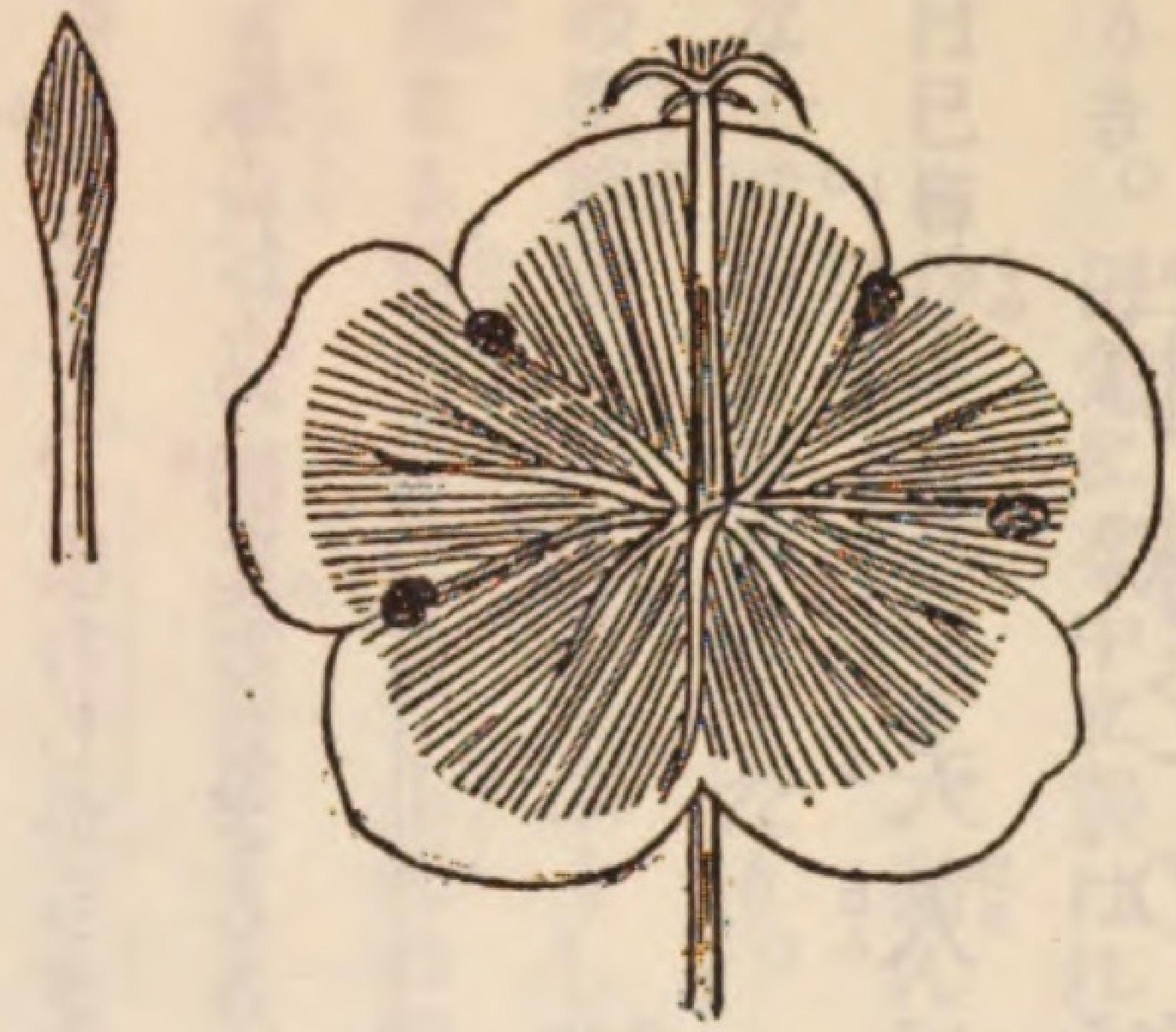


ばらく立つ中に雄蕊の中のあるものは雄蕊と並行して直立し、あるものは元との如とくに花瓣の上に倒れて、第七圖の如き樣となる。此時若し雌蕊八圖の如とく開らきて、花粉を受くるを得ば、最も便利なる地位にありつるを、愚ろかにも雄蕊が花粉を散布して、第八圖の如とく、再たゝび元との花瓣の上に倒をれたる後にて、手後くれにても雌蕊は漸やく柱頭を開らきて、花粉を受くる

第七圖



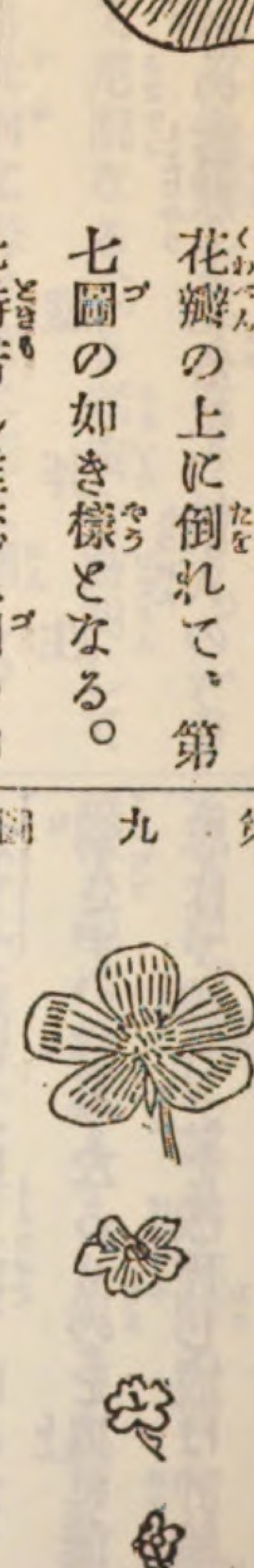
第八圖



の用意をば初むる也。

更らに精密なる植物學者の目には種々なる事とは寫つれり。風によりて結果する類の植物は花粉は乾燥して、形圓形なれども虫類の力によるものは、花粉濕潤して、縱に細そき溝あるを通常とす。又た同なじ種類の花の中にても大なるものと、小さきものとによりて結果の風を異とにせるものあり。例とへば、ジレニヤムに花の大小數種あり、甲種なる、花の最も大なる分は、決して獨力にては結果せず、乙種なる花の少こしく小さき分は、虫の力によりて結果するを通常とし、丙種は會まに獨力にて結果するとあり。丁に至たりては獨力結果するを通常とす、然かるに感ずべき造花の意匠とも云ふべきものあり、獨力にて結果し得ざる花は、多ほくは、

第九圖



色も美るわしく、香も好きが故へに、虫を導くには最も適せるが、獨力にて結果したる種類の花は、小さくして香もなく、美わしからざるを通常とし、虫を呼ぶべき手だての備なわらざるを見出すべし。

文藝

ローラン夫人とカンチー姉妹との交り（二）

鐵斧生

互に取りかわしたる此等の書狀を見るに、兩人のうちソフイーとマノンと比らぶる時は更らに冷靜にして幸福なりき。之れ一にはソフイーの天性然らしむるなり。

マノン、フイリポンに至りては然からず。彼女の情は常に燃へ立つ計りなりき。前途を望んで止まざりき。其の優しき胸には同情友愛の血充ちあふれたり。マノン後にはローラン夫人とて世にも稀れなる女丈夫と生ひ立ちしとは云へ、吾等より見れば彼女が猶ほ此等少女の友愛に夢みし時こそ一段の才智、遠慮、可憐の姿を想像し得る也。

マノンは智識を求むると餓へ渇くが如く、手に任かして有りとあらゆる書籍を讀みたり。而して之を拔粹し諸友と共に討論したり。彼女の曰く『何故に此の如く爲すやといふに、たゞ讀みたるのみにては何の用をも爲さず、讀みたるものを眞に能く己れの者となさんと思はゞ或は之を拔粹し或は評論せざる可からず』と。此の如く勉學に從事し居ながらも少女マノンは夢の如き幽愁に沈むこと屢々なりき。又た自から此の幽愁を拂はんともせずして却て之れに由りて友なるソフイーとの離別の悲を慰へたり。五月の初め、日已に暮れて

寺院の鐘の響くを聞き、母と共に庭先きを逍遙する時など、彼女はいつも忘想にのみふけりぬ。寂寞たる庭の面、甚だ木の葉のざわつくをきゝては、何時しかソフィーを懐はざるを得ざりき。

マノンの母は天性賢こく又た優しき人なりけり。一日マノン父母の許しを得て尼院なる或る老友を訪問して後帰宅すれば、こはそも如何に母は將に死に瀕しつゝありき。母急に卒中に襲はれ、マノンが家に着したる頃は已に物いふ能はず、殆んど人事を辨ぜざりき、間もなく呼吸をひきとりたり。

此の突然雷の如く落ち來りし悲慟のために、マノンは猛烈なる熱病となり、生死の間に二週間を送りぬ。されど彼女は少しも泣かざりき。蓋し餘りの事に涙も出でざりしなり。ローラン夫人の自記に曰く『かゝる時遂にソフィーより一書を得たり。優しき友愛の聲は吾が精神を起て、吾が心を和らげ、入浴も醫師も爲し能はざりしもの此の書狀はなしぬ。吾れこゝに泣き、吾れこゝに於て救はれたり』と。されどマノンが全く快復するまでには暫らく間ありき。

少女最早や少女に非ず、マノン今や花の盛りの乙女となりぬ。花に集まる蜂の如く、彼方こなたより無數の戀人現はれ來りて、煩さく言ひ寄る程となりたり。ソフィーに與へし書狀のうちに曰く、『吾が感情は極めて奇妙なり。如何なる人と雖も、其の人吾れを愛するが故に、吾之れを憎く思ひ、而して又た其の時よりして吾之れ愛せんと勉むるなど、世に之れ程不思議なる感情あるか。然るに吾れに於て實に然り。之れ吾が確かなる經驗なり』と。

かくてマノンは多くの戀人を失望させたれども、自ら遂に戀の淵に陥りぬ。ブランセリーなる青年文學者に全身の愛を注ぎ、例の燃ゆる如き感情を以て、戀の苦しき懊惱にもがきぬ。其の苦惱は悉くソフィーに訴へ

られたり。而してソフィーより返事の來るを常に待ちどふしく焦がれたり。若し待ち合けし書狀恰度晝飯時に到着する時は、之れを衣兜に藏めて食事を了ふる能はず、人々の前にて直ちに封をきり、いつしか傍に人あるを忘れて泣くなり。かゝる時父は微笑し、祖母は曰ふ。

『汝若し夫をもち子を持つに至らば忽ち此の友義も消へなんカンチー孃をも忘れはつべし』と。

之れ聞く少女は大不平なり、思へらく、『此の如く衆人皆な友義を以て一時の浮誇空漠たる感情と看做すに至りては吾實に驚かざるを得ず。世人殆んど友義を以て只だ一時の方略と信じ先方の一寸としたる感情にて直ちに之れを破り之れを變じ得べきものとなす也。ソフィー、爾は如何に事情變ずるにも吾等の此友義破るゝ事ありと信ずるか』と、之れマノンがソフィーに與へたる書狀なり。

おはなし（一）

闇芳

何故世に禍あるか

昔し〳〵、一人の隱者が山に住むで居ました。すると、いろ〳〵の鳥や獸が一向恐れる樣にもなく、何時もお話をしに參りました。

或時隱者が、木陰に横臥になつて居ますと、烏鳩鹿蛇なども、一處に眠りに參りましたが、やがて彼等は、なぜ世の中に禍といふものがあるかといふ事で、議論を始めました。

烏が申しますには、

世の中に禍といふものゝあるは、總て飢餓が其もとになるので、もし欲しいだけの食物が十分にあつたらば、枝にとまつて鳴ひて居て、何でもうれし〳〵たのし〳〵ないものはなく、幸なることばかりだけれども、

もしほしくても食べる物がない日になると、總ての事がみな前とうらはらになつて、此の世のありがたい愉快なことは認めず、たゞ〳〵苦しくなつて、此處彼處にとびまわつても、一として安樂なことはなく、やう〳〵遠方に肉を見つけて、喜んで飛むで行けば、棒を投げられ石もてうたれ、それでなければ狼か犬かに追つかけられて、遂に往生してしまうばかり、飢餓から來る困難はどのくらひだろふ！。凡ての禍は皆飢餓から起るもの」といへば、

鳩　私が考へでは、禍は飢餓よりも寧ろ愛から來るものです、獨身で住むで居たらば、困難も少ないけれども、伴侶あつてそれにまで困難を分てば此身の不幸は彌ますばかりです、それに私共は、何時も共捿むで居て、吾伴侶を愛するので、自分には少しも安心する時はなく、「彼女は充分食べたかしらん、温かいであろうかどうであろうかなど〻、始終心配はたえません、もし伴侶が、獨り何處にかゆく事があれば、鷹にでもとられはしまいか、人にとられはしまいか」と氣にかゝりあとを追つて往つてみると、可憐の妻は、或は鷹の爪にかゝつて居るやら、係蹄にかゝつて居ることもありますかやうに伴侶を失へば、それこそ少しの愉快もないやうになりますは勿論、食べることも飮むこともいやになつて、たゞとびまわりなげくばかりであります、私共の仲間が、斯樣にして死んだものが、どのくらひ澤山かしれません、實に禍は餓飢からでなくて、愛から來るものでありますよといへば、

蛇　イヤ〳〵禍は飢餓や愛から起るものではなくて、意地惡から起るものです、我等おとなしく生活して居たら、さほどの害もせず何でも樂しい事ばかりだが、併他から邪魔をさるれば、直ぐ腹がたつて、見るもの聞くもの、心を和らぐるものはなく、たゞ〳〵復讎の事ばかり心に浮むで、一向自分で抑制ゆる事ができず、

叱といつて噛みつけば、最早慈悲の心も何もなくなつてしまい、自分の親でも噛みさうな勢で、自分で自分を食べる事でも出來そうにみえる、かく機嫌を損ずると、そらだめだ、凡て世の中の禍は意地悪といふ事から起る」といへば

鹿「いや〳〵、世の中の禍といふものは、意地悪からではありません、それかといつて愛からでも飢餓からでもありません、たゞ禍は恐れから起るものであります、もし恐ろしいといふことがなくて、生活する事が出來たらば、それこそ何一つよくないものはありますまい、私共は跳ける事が大そうはやいし、その上丈夫な事も一ト通りではありません、小さな動物の害を防ぐには角をもつて居ますし、大きな動物ならは、跳けてのがれる事ができます、ですけれども、恐れないで居る事は到底出來ないことで、もし森の枝が鬨聲を發し、葉が沙々と鳴りだせば、さあ恐ろしいふるゑがいで、心臓はドキ〳〵と急に皷動し、たまらなくて、直に走り出し力まかせにとびます、やがて兎が後からついてかけるし、鳥が騒ぎだすし、枯枝がパチ〳〵鳴つてくれば、猛獣がきたのであろうと思はれます、かく跳けて實に危険ところにきます、また犬から追ひかけられて走り居れば、思はず人に出あひ、しば〳〵びつくりしてのがれやうとしては、方角がわからなくなつて、崖から轉び墜ちて死ぬる事があります、私共は一方の目はあけ、一方の耳はとぢずに眠らなければなりません、それでさへ始終驚くことばかりで、一として氣樂な事はありせん、凡て禍は恐れから來るものですと、いひ終れば今迄默つてきいてゐたるかの隱者、吾等の困難は、皆、飢餓愛意地悪乃至恐れから起るではない、凡て世の中の禍はつまるところ、吾等の天性が各ちがつて居るといふことがもとになるので、夫故飢餓愛意地悪恐れ何れからでも來るものである。

帝と鷹

某帝一日狩にいで、兎目かけて愛鷹を放ち、馬を跳らして其あとを追ひ玉ふに、鷹は難なく兎をとらへければ、帝は其兎をとり、さて渴をとむ可き水もやありと求め玉ふに、小山のほとりに一滴づゝしたゝる水ありけり。帝嚢中よりコップを取り出し、水の下におき玉へば、水は一滴二滴したゝりていつしかコップに滿ちぬるをイザヤのまんと口に近づけたまふに彼の鷹俄かにとびきたり、帝の手にとまり、羽ばたきして其水を覆へせり。再び帝はコップを泉の下におき、やゝ久ふして漸く一杯にみちければ、のまんと唇をつけ玉ふに、彼の鷹再び帝の手首にとひ來りて其水を覆へせり。三たび帝はコップを滿たし、唇をつけんとし玉ふに、またしも鷹は覆へしぬ。帝勃然として大に怒り、力任せに石もて鷹をうち殺し玉へり。程なく從臣來り、其一人は更に多量の水を得て、速かにコップに滿たし歸らむと泉の方に走りゆきしが、やがてむなしきコップをたづさへつゝ歸り來り、謹んで申しけるは此水は飲むまじき水に候、泉の中に蛇の死骸ありて、水はくされて候ふなり、よくも鷹が水を覆へし候ひける、陛下若し此水をめさせ給はゞ、御生命危くましませしならん」と。帝きくより早くあゝ朕は情けなき報ひを鷹になしぬ、彼れは朕を救ひしに朕は彼をころせしよ」。

樂しき旅

其一

藤島ゆき子

五月三日の晝つ方、衣縫ひ給ふ母君の御かたへに侍らひて、父君の御料の靴下編みゐつゝ、さいつ比より京

都にいませる父君の御旅いかならむなど語らひゐたる折しも、父君の御許より御文來りぬ。急ぎ開きみれば、近き程に歸らむと思ふを、今は博覽會にていと賑はしければ、母君と汝と來よ、こゝかしこ伴ひゆかむ、とく來よと記させ給へり。いつもながら御慈愛のあふれたる御玉章、くりかへし讀みて、かねてより行見まほしう思ひし本意かなひたる嬉しさ、いはむ方なし。母君よとくこを讀みませと出すを取りて、讀み終へ給ひつゝ、こはいとも喜ばしき御文かな。汝がよみながら微笑みゐつるは、かゝる故なりけりとの給ふ。さは急ぎて旅だちの用意し侍らむと、衣や帶やと取出づるも、いと心あわたゞし。

四日朝とく起き出づ。昨夜は嬉しさによくもねられず。今朝も暗き内より起きて、親族の人々、又信州なる友をはじめ親しき友の許に、しばし旅だつよしの文かく。何くれの用意も大方は整ひぬれば、母君の代りに留守の中の事ども賴みまゐらせんと、九時少し過る時、本鄕なる伯父君の御許に至る。そは余りにとみなる事よ、されど願ひてもなき幸の事なれば、樂しく行て來よと、ねもごろにの給ふ、いと嬉し。伯母君にも母君の言づていひて、よく願ひまつり、時もなければと急ぎ歸りぬ。朝風少し身にしみておぼゆれど、空よく晴れたれば、いと嬉し。家に歸りて時計を見るに早や十時に近し、急ぎ髮を束ねて、昨夜母君の買ひて給ひしうす紫色のリボン持て結び、又この三月の始つ方、父君の大坂より歸りました時、家土屋にとて給ひし安藝の嚴島の貝のかんざしをさす。車にて新橋に至れば、家人は先に來ゐて、荷物をあづけ切符をも買ひて待てり。待合室には、乘る人、送る人、迎ふる人、みち〳〵ていとらうがはし。

父君の御許に、今出立つよし電信をかけて、車に乘る。長き道なればと、毛套をしき座を設けぬ。車いでむと

する比、相知れる者來給ひて、同じ列車に乘りましぬ。何處までものし給ふぞと問ふに、神奈川までとの給ふ。母君打笑みつゝ、われらは京都にものせむとするを、共にものし給はずやとの給へば、行かまほしけれど、事しげき身はせんなし。よく見て來て、物語を聞かせ給へなど語らひ給ふ程、笛の音と共に動き初めて、一筋の烟を都の空に殘し、早や品川に至りぬ。此處にて乘れる人あり。知れる君と親しき人なるべし。君は何處にぞ、われは大磯になど語り給ふめり。かねて乘る人多しと聞しかど、さのみならでいと便よし。わが向の側には、七八人計り乘りゐたり。中に愛らしき男子二人、兄弟にやあらむ。同じ水兵の服つけて、帽子もひとつなり。乳母と下女とつきそへり。小さき國旗打ふりつゝ、幼き聲にて唱歌をうたふさま、いとをかし。大森の海見ゆ、汐の干潟におりたちて貝拾ひし春、おもひ出られてなつかし。八景園の下なる梅、青柴の梢すゝしげに茂げり渡れり。池上をあなたに見なして、玉川を渡る比、此處の堤を歩きて、小向井に遊びし時おもほゆ。川崎を過て鶴見川を渡る。彼方に去年の夏すみし、成願寺山見ゆ。杉の木立のひまに住みつる家ゐと見ゆ。双眼鏡を取出てながむるに、鶴見の林たゞ目のまへにあり。

おしなべて青葉しげれり萩が花
　手折しあたりいづこなるらむ

此わたり、麥生の緑なる、菜の花の黃金色なる、見渡すかぎり打つゞきて、いとなつかし。神奈川にて知れる君は下り給ひぬ。今夜一夜は母君と唯二人この車の中にありて、知らぬ人々の中に明す事かと思へば、何となく心細く、かよわき胸は波だちぬ。されど明日は父君と共に、樂しき夕けをなす事とおもへば、樂しく成ぬ。横濱に着くに、乘る人いと多く、苦しとおもひたれど、程が谷戸塚にて下るゝ人また多く、苦しびは

かへりて喜びと成ぬ。大船にゑばし車止ぬ。逗子にものして、田越の浦の浦づたひせし夏おもかげに浮べり。常に休息ひし濱べの木陰には、今も波のよせてやあるらむ。磯わをかざりし梅の花貝は、こゝにかしこに落てやあるらむ。夏島に遊びし時、わが根こじ來て、宿れかし家の庭に植しさゝやけき楓は、めぐみてやあらむ。とり〳〵になつかしと母君に語れば、いつも小供のやうなる事をと、打ゑみましぬ。かばむと洋傘とを持て、横濱より乘りし人あり。いづ方に行くにかあるらむ。停車場に着く毎に、下りて彼方に行く。藤澤にて又も下りゆきしに、三分計り止てやがて動き初めぬ。されど彼人は來らず。かばむも傘もさながら置きてあるにかたへの人々いたく心配しつゝ、氣の毒なる事よ、如何にすらむと人々のいひゐたるに、次の停車場にて、其人は歸り來て、事もなげに窓によりそひゐるを見て、又人々は驚きたるさまなり。國府津にて荷物を携へ下り行ぬ。見れば、外つ國の婦人三人と共にあり。あなをかし、やう〳〵悟りえぬ。通辯する人なりしなり。度々出行しは、外つ國人の爲し方に行しなるべし。大磯にては、下りし人四五人、乘りし人一人ありき。彼愛らしき子もそこにて下りたりき。幼き唱歌も聞きがたく、いと殘りをし。そなれ松の木の間〳〵より見ゆる相撲の海の景色をかしきをながめ、やう〳〵徒然なれば、携へ來し菅笠日記中空日記など取出て、こゝかしこ讀む。雲深き足柄箱根を右に左に見なして、松田に着ぬ。此邊より山坂を上るならむ、車の進みおそく成ぬ。

こえわびし昔の人のくるしさを
知らぬも御代の惠なりけり

あるは山、あるは林、あるは川、あるは瀧、見る間に變りゆく景色いひゑらず。けはしき山の片そばに、櫻草さけり。やさしきその色もその匂も、あはれとめづ

る人なきを、わびしとかこちてやあらむ。はたなか〳〵に憂世の風にふれず、ひとり深山の奥に春を送るを、樂しと思ひてやあらむ。花の心を志らず。隧道は七つ入つなりけむ。出ては入り入りては出づ。暗き闇路をがう〳〵とすさまじき音して過ゆく程は恐しけれど、ぬけ出て青き空を望むは、いと心地よし。御殿場のわたり、富士を仰ぐに最もよき處と聞ゐしを、今日は雲かゝりて見えず。風の御神、心あらば、不士の君のおもわをおほへる薄衣取去りまして、けだかきみ姿を見せしめ給へと、心の中に祈るものから、其かひなきぞ口惜しきや。佐野に着ぬ。こゝには瀧園ありときく。行先を急がずば立寄らまほしけれど、せんなしと母君の給ふ。今はまだ寒ければ、暑き頃父君に乞ひて父母君もろ共に侍らむといふに、例の我まゝなることよと打笑み給へり。しばし行くに、菜の花咲つゞける所あり。窓あけて見ゐたるに、同じ色の蝶の飛ゐたるが、羽袖かろげに打舞ひて、窓の内に入りぬ。あれなつかしととらむとすれば、又飛び去りぬ、惜しき事をしつ。此處に入れおきて、西の都に伴ひゆきてましをといふに、母君また笑ひ給ふいと恥かし。沼津鈴川岩淵などの道の邊に、里の子の群れ遊べるが、小さき紙にて作りし日の丸の旗を打ふりつゝ、萬歲〳〵と、あらむ限の聲を出したらむさまに叫べるも、かつは愛らしく、かつはかゝる片田舍のうなゐらに至るまで、皇國を思ふ眞情の小さき胸にみちあふれたる志るしぞと思へば、いとゆかし。興津のこなた薩埵峠の隧道をぬけ出づるに、清見潟のながめいはん方なく、こゝかしこに岩見えて、よせては碎くる波の、時わかぬ雪か花かとふまがへらるゝに、長くつゞける三保の松原、色みどりなる天つ少女の羽衣かけ、むもことわりなる處の景色なり。靜岡あたりより日は西に入り初ぬ。家より持て來し夕けの料のサントウイッチを取出づ。こは父君

の旅行志給ふ時に、携へ給ふにしあれば、われらも持て來しなりき。かく二人にて折々語りてだに、長き旅はたへかだきを、父君がいつも一人にて往來し給ふ時は、如何ならむなどいひつゝ、少したうべつ。大井川を過る時は人々皆窓より見いだしぬ。祖父君また父君の若くおはせし頃、東海道を幾度となく上り下りし給ひしに、此川の水かさ增される時は、十日も廿日も川ぞひの驛にやどり給ひし事ありつと、折々の給ひき。今は只僅の間に渡り果て、いくその旅人の身をも夢をも打のせて、此事の走せ行く事よとおもへば、開けゆく御代の嬉しさ、今更に思ひ志られ、又かく旅の往來容易き御代に生れて、こゝかしこを樂しく見る事を得るわが身の幸ひは、皆父母君のたまものぞと、そこひ志られず厚く深き御惠を心に感謝して過ぬ。天龍川を渡る比、起きてゐしはわが外に一人二人なりき。こゝを渡るとて、かの圓位上人の昔を志のびし阿佛の君の、われは又志のばるゝに、一昨年の夏遊びし極樂寺の庵の跡など、目のまへに浮び出でつ。濱松も過ぬ。濱名の景色、晝ならましかばと思ふ折しも、やゝ曇りゐし空より、月かげほのかにさしいでゝ、波に浮べるさま、島より島にわたりゆくに、松の梢色うすう青うみゆる、さいつ比雜誌にて見し外つ國人の油畵思ひ出られて、我も筆とる業知らましかばと思へど、幼なき時志ばし學びしのみなればかひなし。せめてはこの景色を、長く心に志るしおかむと、窓よりながめゐたるに、波の音松の聲は、相和して妙なる琴を志らべ、けだかき歌をうたふが如く、眠りがほなる月は、靜に此尊とき調、靈妙しき歌をきくに似たり。あはれ車よ。汝はさま〴〵の人、くさ〴〵の思を一つに乘せて走せ行くめり。此よき景色をも、ねて過すらむ人もあらむ。されどまた、此月、此波、この松にむかひて、いくそばくの思ひをおこす人もあらむ。彼日夜ひんがしに流れ去

る川にはあらねど、かかる景色をよく見てむと思ふ人の爲に、しばらくも止まらぬは、いとも口惜しやといへど、進みゆく車はしらず顔に、風をきり闇を衝きて、波上の月をも跡に、松風の聲をも殘し、こゝらの山こゝらの里をよそに、走せ行く。蒲郡といふ所は、海にそひて、かなたに島あり。興津舞坂わたりにつゝきて、此車中の景色よき處ときけど、月かすかにて定かならぬ間に過ゆきぬ。今は大方人々打ふして、物語る聲もきこえず來ぬ。唯上なる燈火のみかゞやきて、車の走る音心にひゞき、さびしさたへがたし。母君は、さいつ比いさゝか御さはりありて、御身未だ常の如くならねば、堪へがたくやおはすらむ、いととくより打ふしたまひて、川よ海よと告げまゐらする度毎に、かしらもたげ給ふのみ。筆とりいでゝ何かかきつけむとおもへども、そも心づかずして筆も紙もかばむの中に入れおきつ。かばんは軟かき肩掛をおほひて、母君の枕にしつゝふしゐたまふを、驚かしまゐらせて取出さむは心うく、こそ思ひとゞまりて、もて來し書を讀む。菅笠中空の二つの記は、ひるま大方讀みたれば、山家集と藤簍冊子の一二の卷とのみなり。憂世をよそに振捨て給ひし聖の歌は、心なき身にもあはれくみしられて、見る度毎にあはれ深く、落花の歌、また花の歌十五首など、くりかへし讀みつ。人はますぐにゆくを、われは横さまにとかいはれけむ無腸翁のは、いつれも皆、世をいきどろしくおもはれけむ心しるく、冬の野の枯生に交る艸の床にいつ立つ空と空雀なくらむ、又。我を知る人しなければ我知らぬ人に見すべき言艸もなし。又うつ蟬の世は海にかも我はもよ棚なし小舟。沖邊ゆかば風をいたみか。沖つかい取がてぬかも。ありそ邊は波のさわげば。邊つかいも取りえぬかもや。人皆はしるにはあらじを。我はもよせのしれ人ぞ。難波江の芦の八重ぶき。ひまもなく物をぞ思ふ。などあるを見

ては、あはれなる翁の心思ひいでられて、胸いたうなりぬ。名古屋一の宮など過て、長良川を渡る程、月さやかになりぬ。こゝの流れは水いと清く山の姿よそに似ずときゝしも今はたゞ山のかげ暗く、こがねの波に月のきらめくのみ。鵜飼の比いかならむなど思ひつゝ、あまりに起ゐては、明日つかれなむ。志ばし打ふしてみむと、つとめて書をも閉ぢ、目をもふたぎゐし間に、ねむりけむ。知らぬ内にこゝかしこを過て、関が原艸津などかすかにきゝぬ。いづことも知らず起きいづれば、朝日の光ほの〲と窓にさして、母君も目をさましてゐませり。人々もおきてあり。隧道も幾つか越しぬらむ。此處にても一つ過ぎぬ。ゆき〱て停車場に着く、驛夫の七條とよぶに、急ぎ母君を助けまゐらせて、下ぬ。新橋にもおとらぬばかり、いといかめしき建物なり。まだ早ければ、茶店わづかに一軒のみあけてあるに入ぬ。そこにて車をやとひて行く。門はまだ閉したる家多かれど、たま〱小僧のはゝき取り水まきゐるを見れば、大方は大なる子の、かぶきり姿なる、見なれぬ目にはいとをかしく、又小原女の繪にみしと同じく、柴をつみて頭にてさゝへゆくも、いと珍らし。東本願寺の前わたりするに、いと高大に見ゆ。詣づる人多く、賑はしげなり。某町なる某ぬしに至るに、夫妻の君待よろこぼひて、主まうけのねもごろなる、いと嬉し。まづ父君の御旅やどりに、文かきて今着し由使さゝぐ。

想夫戀

筑峰女史

妻は涙を隱しつゝ行李に入るゝ調度の數々も想ふにあまる寒帶地妻が情の厚衣もはる〲きても歸らるゝ事はそれともしらま弓引とむるべき身ならねば共に喜び

勇みつゝ進めて送り送らるゝ心の內やいかならん想ひやるたにあまりあり。夫が出陣せし後は日々かはる新聞と夫がおこせる玉章をくり返し讀みては神に安穩をかけて祈るも夫のためぞかし。さはさりながら軍人其の者の身にとりては今ぞ花咲く渤海の海原高く照る月と共にいさほを家つとに歸るを得さればいさぎよく名もたち花の跡とひて後の世までも芳しき鏡となるを願ふぞかしと送るも深き想ひ草とひ來る人のうわさには此の頃は臺灣に移りし由彼の地は悪疫非常に流行し何れも激症なるとの事コハいかにせん口惜しゝ討死にするは軍人の習ひしなればいかでかは元來覺悟し侍るなり去りながらもしも病ひにかゝり遺がいを異境偏土にとゝめもせば其身は勿論家族まで何んぼふ口惜しく侍るべきそれにつけても夫よりはこの頃更に音信のあらざればもしや病ひに冐されて入院でもされしにやいかゝあらんとゝつをひつさすが女の一念に夫を想ふ眞心は片時のゆふよも出來ずして夫と同時に渡清せし人の家族の東京に住めるに就て尋ねなば或は樣子も知れやせんと急ぎ橫須賀のほとりなる我家を出てゝ滊車に乘りをふ舟の停車場にて上りの車まちいたる折しも東京より下る列車の窻よりも顏さし出す其の人は軍人にてありければ妻なる人見るよりあはてゝ聲をかけあなたはもしも戰地より歸り來ませし君ならずやされば我が夫も先つ頃までは大連灣にありとの事お心安くはありつるがこの頃南にむかわれてはやる。コレラ。に身まかる人の多しときくにくらべて夫より絕えて音信あらざればもしや病にかゝりやせぬかと案じわづらひ侍るなりもしかく人の我夫に逢ひたまひし事のあらじ侍らづやと突然激發の尋問に彼の軍人は言葉を和らげされば我れ等も先つ頃餘義なき御用に止むを得ず大連灣を發足なし歸京の上今日は橫須賀へ赴くなり尋ねたまはる其の人は必ず無事にてありつらん我が同僚某の咄によ

れば慥にあなたの良人ならん非常に軍務多端にてまどろむひまも無きまでに守る役目の重ければ夫故音信もなき事ならん何れ其の内に御便りもありぬべしさな心にかけたまへぞと鬼もあざむく軍人も其の心情を察してやいとねむごろに語りつる言葉もいまだつきざるに上りの滊車の着きぬれば妻は禮を述べて乘りうつり心殘こして西東し別れてこそは進み行くやがて新橋につくや否や志ざす人の元へ急ぎ行き樣子をきくに四五日前來りし文に惡疫も大分滅らぎたるよしの記しありしと聞くよりも安堵に心いさみつゝいとまそこゝ引かへし行く滊車も。いと。ひまとる心地してほどなく我家に歸り來ていそぎて明くる門の戸に出會頭らに留守居の者朝夕またれし御手紙こそ參りたれ喜こびたまへと渡すや否ひらくまをそしと封とく／＼讀み下すにいともいさぎよき玉章に心の雲も晴れ行きて只一日も速に目出度凱旋あれかしと神にいのりをかけまくも御國の爲めとはありながら夫の身の上思ひてはさすが女の悲に返り一種云はれぬ暗涙に咽びて其の日を送りける。

初戀の記

森愛軒

其二

小兒らしき無意識の戀は眞に愛らしきものなり、彼等は泣く時は眞に共に泣き、喜ぶ時は眞に共に喜べばなり。然れ共彼等往々にして潔く離るゝ事あり、是は彼等の戀は人の戀にあらずして天の使の戀なればなり。　愛子

今は秋の半なり、四方山の景色は茸狩る小兒、栗拾ふ小兒に向て色付き初めたり。當時惡戯盛の余は其の山野の間に遊ばざる可からざるなり、然れ共余は此年まで春なればとて秋なればとて決して夫の泉の外に自然の中に入る事を欲せざりき、否欲せざるに非ず、余は多くの口さがなき童兒の友達に罵られんとを恐れしが故なり。然れ共今年は始めて見苦しき軛より自由を得

て他の廣大なる然も温かき自然の懐に抱かる可き機會に逢遇したり、是は彼の小女が毎日余の許に遊びに來るより起りぬ。

余が學校より歸り來るや固より復習などは最も好まざる處なりければ、書物は机の上に投げ捨てられ、主人公は直ちに己が室の椽先に腰を掛け足の先にて交る〳〵椽の下の空隙を後ろに蹴りつゝ、手を後樣に支へて西方の小松原を眺め愛らしき小歌を歌ひて彼の小女の天の使の如く生へ茂りたる野菊の中を飛び來るを待ちつゝありしなり。

今日も例の如く、余は椽先にて小女を待ちつゝありしに、彼の小女は走り來りて「今日は」と云ひながら余が膝の上に兩の手を載せ其上に頭を投げつけながらあへぎをれり。

「光や、今日は如何にして遊ぶべきや？」

「若樣、妾は今日魚探りに行んと思へり、いかにや？途中にて夫の野川に鮒の澤山遊び居れるを見たれば。

「そは面白からん、余は直ちに籠を持ちて行く可ければ光は手桶を提て來れよ。」

斯くして今日は魚漁りに出掛んとて用意せられぬ。余は跣にて裾をまくり、籠を携へて松葉の散り敷く小道を抜き足に腰をヒ子クリ走り行く樣のをかしければ、後より眞の笑をなしながら將に倒れんとしつゝ走り來る小女を見たり。余はあまり走りたる爲めに野川の傍に來りしや否や、其塲に倒れて息をつぎ居たりしに小女も亦キヤラキヤラと打ち笑ひながら余が足の先に來て狗兒の如くマロビぬ。

「光や、余が袂を結びくれずや。」余は袂の八ッ口より腕を出し、袖を背にて結ばせぬ。

「若樣、妾のをも結び玉へ。」余は小女の袂を結びやれり。

斯くて二人は茅萱の下をくゞり行く憐れなる小川の傍
にて漁人となれり。余は小石の上を躍り行く小川の淺
瀬に程よく篭をあしらひて待ち居れば、光は長き竹を
以て掛け聲しつゝ深處より追ひ上せ。「若樣早くすくひ
玉はずや、」と云ふ聲に應じてすくひ上げ。余は叫びき
「光や、大きなる鮒二匹あり。」「妾にも見せ給へ、」「否
是は余の魚なり、」「否妾が追ひ上げたるなり。」はては
二人が追ひつ追はれつ余は兩の手に鮒を持ちながら
走れば、お光は、地を打てうちまろびながら余が後追
ひたり。「光や、もー御免余は是迄見せ得るなり、此は
大なる鮒なれば山椒を入て煮ば味よからん。」「然り大
なる鮒なり、うれしき事かな、此度は妾にすくはせ給
へよ。」「否、汝は矢張竹にて追ふべし、余がすくふ可
ければ。」
二人は川下へ川下へと漁り下りて早や少女の持る手桶
の充る程になりぬ。余は魚取りにも倦みければ「光や、
余は歸らんと思ふなり魚も最早澤山なれば、されども
余が愛する家に立ち寄りて行かんと思へり、いかにや
？。」余は直に愛らしげにうなづく小女を見たり。
頃は早や四時頃にもやあらん、太陽の光線は既に茜色
を帶び野面は一面に眩くなり、棘の茂れる丘などは、
きら／＼と緑輝き明かには見分け難かりき。二人は森
の中に入れり、森の景色は概ね黒みゐたれ共、未だ木
の幹の立ち並ぶ部分は明くして奇妙なる色に輝けり。
篠の茂みはサヤ／＼と音して軟風の走る道筋にうね
り、赤き實を重たげにつけたる馬形グヒはしきりにう
なづきながら稍もすれば二人の可愛ゆき道行の袂をと
ゞめんとせり。小女はかゝる淋しき場處になれざれば
不審な顔付して澁々につきそひ來りしが、松風の聲な
る次第にゴウ／＼と凄みはじめ、肌吹く風の冷かにな
り行くにつけ、」此處よりまだ遠きや、妾は歸りたくな
りたるに、」と悲しげに空を眺めたり、小女は日の暮て

より彼の女の內まで歸らん事の心細くなりたればなるべし。」日の暮たらばいつもの如く余が家に泊りて行かばよかるべし、」と云へば小女は氣の毒なりと思ふ心もなく只余と共に遊ぶ事の樂しさのみ心の中に蟠まりければ、隨るゝばかりの含笑を笑凹に浮べながら舞ひ來れり。二人は既に泉の傍に來れり、余は籠を降しながら例の柏の木のかぶを拂ひてお光と並びながら腰を掛けぬ。泉は今は躑躅もなく玄ゆんさいも枯葉のみ浮みていとも殺風景なれ共、水はかの飾りありし夏よりも尙ほ清く澄み渡りて二人の相戯るゝ影は黑く明かに庭に映りぬ。而して余等が回りを圍める多くの老ひたる杉の木には、今しも宿假り烏の四方八方より群をなしつゝ後になり先になりてカオ〳〵と啼きつゝ歸り來り余等が遊び居る泉の上に舞ひ來れり。今迄で淋しく靜かなりし森は遽かに多くの賓客を容れ時ならぬ盛會にていとゞ囂しくなり初めたり、余は兩の手を合せて口にあてカオ〳〵と答へたるに烏は一層上手にカオ〳〵と叫べり。余と烏は暫くカオ〳〵問答し烏の數は愈多くなれり斯くして余が餘念なく戯れ居る間に小女は鮒を籠に移し、清水を以て手桶を充しては又鮒を手桶に入れなどして、頻りに鮒の衛生に手を盡しつゝ日の暮るゝをも忘れ居たり。

「若樣、日の暮れたる事よ、今宵は月なき夜なり、かく多くの鮒を以て森の中を彷徨はゞ狐にばかさるゝ事はなきやと。」大きなる聲にて目を丸くしながら口を尖らして叫べり。余は此鋭き聲に驚きながら急に視線を返して彼の女を見たりしに彼の女は既に早や手桶を携へて將に歩まんとしつゝありたり、「狐にばかさるゝことはなきも、母樣の待ち居らる可ければいざ歸らん」とて立ち上り、いとゞなづかしき森を離れて家路をたどりぬ。

二人は今余が室にて料理を初めたり、土爐と土鍋とは

用意せられ火は赫々と燃へ上り山椒の香しき薫りは室に滿ちたり。小女は鮒の腸を取り去りては鍋に入れ余は團扇を以てバタ／＼と土爐を煽ぎ立てたり、早や御馳走は煮へ上りたれば先づ一ト皿盛りながら「お光や、是を母樣に上げて來れよ、而して父上にも盛り置く可ければ。」

二人は今六才になれる余が妹と三人にて輪をつくり、樂しき家庭の晩餐は斯くして酣になれり「若樣よ、妾は奥樣となるべければ、郎は旦那樣になり玉へ。」「よし、余は旦那樣なり故に御身は余が爲めに飯を盛る可し。」斯くも愛らしく打ち戯れ居たる時母上は突然障子を開けて今日の御馳走の禮を述べんが爲めに來り玉ひ、種々面白き滑稽談など語り出で玉ひて興を添へられぬ。余等も亦殆んど食し終りたれば此日の宴會は是にて終りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

斯しくて樂しき茸狩はなれり、斯くして樂しき栗拾ひはなされぬ。余は實に此故鄕の自然は余等二人に由て遊ばる、領し盡されたるに非ずやと思ふ程なりき。故に自然の景色も亦惡戯一方の村童に由て弄ばるゝよりも余等二人に由て遊ばるゝ事を望めるが如く、二人が森に入る時は、二人が林に入る時は、他の友と共に入る時よりも温かく覺へたり。

然れ共余が斯く樂しき境遇に進めば進む程只さへ擯斥せられたる生涯は益々肩身狹くなり行けり、其は余と同位置の童兒よりは「彼は士族にして平民の而も賤しき女郞と交れり、穢き奴なり」と云はれ、位置低きものよりは「彼は高等小學に行きながら女と遊べり」など時としては聞くも卑しき小兒らしくもなき惡口をさへ聞きたる事ありき。然れ共余は余と同じ境遇にありながら尙ほ無邪氣に余につきまとふお光を見る時には、かゝる罵詈を受くるとこそ反ッて愛の神より憐を受く

るが如き心地して、童兒等より斯く拒けらるゝほど拒けらるゝほど益々小女と親くなれり。

十四才に近き余と十五才に垂んとする彼とが斯くも無邪氣なる小兒らしき遊をなしたる事は、世の堂々たる小説家にすらも疑はるゝ事ならん、否余自身にてすらも今では之を疑へり。然れ共遊て陶淵明を理想として造られたる漢學者の潔き〝寧ろ世表の外に逸したる家庭の中に生長したる余〟特に全く世俗の童兒と交を絶たれて孤獨なる生活を送りたる余は不思議なる程是の世の内に付る罪惡に付ては無邪氣なりしなり。彼の女も亦賤しき貧家に生れたるに似合ぬ尊き品性を備へたるものなるにまして彼の祖父母は昔し莊家を勤め居たるものなりければ、多少他の百姓なりし者の家庭よりも清く生長したるを得しならん。されど彼の女をして一層高尚ならしめたるものは七才の時母を失ひたる事なり、故に彼の女も亦母なき子として村娘より擯斥せられ、余のありしが如く寂寞なる生活を送りたればなり、余は孤獨寂寞なる生涯は兒女の生長を清潔にならしむるものなりと信ずるを憚らず。

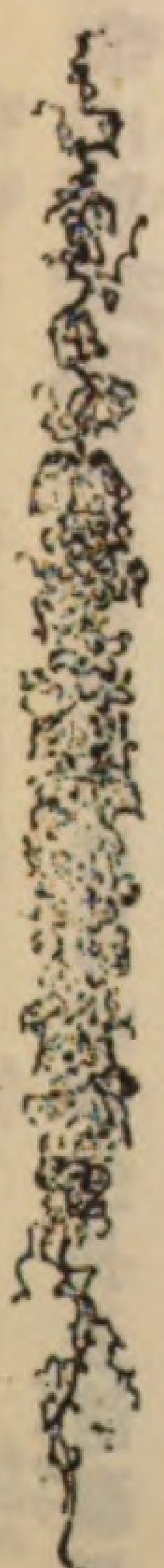
既に此年も暮れ、明れば余は十四才となり、小女は十五才となれり。年と云ふものは可笑しきものにて性質は左程變りたる處はなきも、今年は昨年の如く自由に小女と會合する機會を與へられぬ事となりぬ。如何となれば余は此三月にて高等科を卒業して大阪の叔父の内に行き心當りの學校に入り、小女も亦余が故郷より四里程距れたる津山の某裁縫校に入る事となりたれば二人共之が準備の爲めに多忙かりければなり。余等は共に此年まで翼の下に在て育てられたる自然の中を出でゝ遠く遊ばざる可からざる身となれり、然れ共兎角發達期に於る少年の習として凡ての消極的の境遇をも積極的に解釋せんとするものなれば、斯く荒野に立てる可愛らしき女郎花によれむつへる朝顔の蔓のもり

〳〵と引き分けらるゝ場合に臨みても相逢ふ毎に打ち興じて復逢ふ時の樂など無暗に語り出で、是の悲しき離別をも反ッて珍らしく面白き事の樣に思へり。

斯くする内早や四月十五日となり、今日は余が出立の日なり、多くの友人は余を見送らんが爲めに來れり、お光は其中の最も輝ける者なりき。余は今や門に待てる車に行李のみ積み、後の馬場までは歩む事となせり。余は勇ましく歩み出したり宛も若き駒の貴公子を乘せて戰場に向ふ如くに躍り行き、多くの友は面白げに囃りながらドヤ〳〵と後より續けり。送別の場所は松と櫻の殊勝げに立ち並ぶ共有の馬場と定められ、友は皆一齊に帽を取れり余も亦帽を取つて之に答へぬ。父と母とは懇ろに車の傍にて種々の事を語り玉へり。

車夫は赤牛の禿げたる如き毛布を以て覆ひ初めたり、是の時余は大なる失錯を見出せり其は今日の主人公なるお光に別れを告ることを忘れたる事なりき。余はいそぎ車を降り「お光々々」と呼べば後の方に小女は赤き顏して小さくなりながらかゝみをれり、「光や、余は今立つなり、復逢ふ日まで共に達者にておらんことを希ふなり。」と云へば可憐の小女はモヂ〳〵しながら櫻色の頰に言はれぬ笑を包み、袖を以て顏を覆へり。多くの友は是を見て冷かに笑ひぬ。』車に飛ぶが如くに走せ出し故鄕の田園は次第々々に矢の如く余が後方に走せ去れり、余は最後に村はづれなるお光の家の後を圍める藪の景色を見し時、自然は余に左の如く告げたる樣に覺へぬ。

「汝憂ふる勿れ、我は我が懷にお光を受取れり。我は汝が成功して歸り來らん日迄には彼の小女をして天の使の如く育て上げ汝の前に置き得るなり。」



家政

暑中の後園

門前には美麗なるばらのアーチを造くり、前庭には毎朝ようじを嚙わへながら、草一本も生へしめざる樣見廻り、外見は清潔らしき家、一廻して臺所の庭前へ至れば數週日積み置きたる葱の頭、ジャガ芋の皮、味噌の漉糖、大根の葉、所きらわす投げ捨てられ、流がし先きの溝は茶碗の欠げにてふさがり、ために汚水は飲用の井戸にすき込み、冬日ならばまたしものと、なれども是れよりの時候には鼻もむけ得ぬ臭氣なるに平然少しもかまわざる家あり。奥の庭を清潔にせざることは、流行病の芽を製造する樣なるものにして、恐ろしきは今日以後の氣候に際して云ふまでもあらず、コレラの種子も、チブスの種子も、マラリヤ熱も、チブテリアも、か丶る處にこそ喜んで、發生し、成長し、果ては飛散して人躰に害を加ふる也。

されば奥庭を清潔にするは、第一健康のために最も必要なるは云ふ迄もなけれども、其の利益は更らに經濟上に甚だしき關係を及ぼすものあり。一度分の菓子料を投じて、竹屑づを求とめ、二間四方の鳥部屋を造くるは、日曜半日の運動時間にて充分手製に爲し得べし。玆に數度の車代を儉約して三四羽の雞を飼ひて見給まへ、好き時候ならば四羽は四羽共も毎日の樣に新鮮なる卵を生むべし、悪しき時候と雖へども、平均一二個を生まざる時はあらざるべし。雞は流し先きの捨てものを掃除しつ丶、生長し、凡べての虫と凡べての草の根を絶やし、然かも人類に大切なる滋養物を供す、之れを經濟の道に叶なわずと云ふ人はあるまじ。又た流し先きの汚水の定ためなく溢ふる丶は、二三尺の深

さのどぶを掘りてそこに溜め給まへ、美味なる茄子、新鮮なる胡瓜、愛らしき菜豆は其汚水のおかげにて、魔法使かひの手にも觸れたらん如く、青〳〵と又た延び〳〵も天空目がけて育だち登ぼり、之れも同なじく不潔の中より、金銀にも勝さる滋養物を生ずべし。經濟は去りながら、其の樂のしみは更らに言葉に掲げ盡くし得べくもあらず。朝まだき未だ露深かき頃起き出で〻、手植し後園にふみ分け入れば、黒ろ〳〵しきに玉を上せたる茄子の若か木は、勢ひ盛んに我等を迎かゆる傍に胡瓜の蔓は愛らしくも、細そき手を以て間垣に纒わり、青々としたる葉の間に目も醒むべき黄金色の花は笑を含くんて窺きたる樣、散歩の際農家にて兼て見し、同じ植物の樣にも似ず、己が手植へし捕物と思もへば、その愛らしさ、その樂しさ、殆んど別物かと疑たがわる〻計りなり。

さて茄子、胡瓜、菜豆、芋、唐もろこし、南瓜、西瓜等は昨今植付けの時なれば、苗を求とめて、不潔の後園を掃除し、玆に植へつけ給へば、樂のしみと經濟と健康の三つの得はそこより一時に上がるを得ん。

通俗天氣豫報

明日園遊會に行かんと待ち受けたる小供、今年の收穫を氣づかひつ〻ある農家、沖に漁せんとする漁夫、遠方に息子を使かわしたる母、類と場合に違がひこそあれ、天氣を見定だめ得るの法もがなと、心を焦がす人々は、世界をおしなべてその數かぞへ得べくもあらず。

さればにや、種々の俗説は愚民を惑わし、或はつまらざる事を擧げて、重々しく雜誌等に書き立てたるが多きが、中々に當てになるもの少くなし。左は米國にて、古るく云ひ來たれるものと、古るき學校の敎課等の中

より斟酌して、全國一般に云ひ傳へらるゝ、通俗天氣豫報にして、其の數五百計かりもある中にて、我が國にて通常適用し得らるゝもの數種を掲かげたるもの也。但し當否は、讀者の實驗に一任するのみ、

第一非常に好き天氣の打ち續づきたる秋の後には、風荒らき冬あり。風荒らき冬の次ぎに來たる春は、雨がちなること、古るき經驗に照らしたる一般の說也。

第二東し風に伴もなひて降り來る雨は、通常二十四時間は續づくべし。

第三朝より降り始じめたる雨は、正午に止むと多きが、もし正午に止まざるときは午後五六時に止が多ほし。されど東し風のときはこの規則に合わざることまゝあり。

第四星の光かりが常よりも一ときわ目立ちてキラ〳〵と明きらかに、且つ其の間と間が近かく見ゆるときは通常雨の前兆也。

第五猿が矢鱈は耳を動ごかし、おかしき聲を出して鳴き、或は躰を頻きりに木や壁にてこするときは、通常悪しき氣候となるの前兆也。

第六鼹鼠は非常に賢しこき動物にして、寒温の度合に應じて己が住居の穴を穿がつものなるが、その穴の深さ二尺六寸に及ぶ時は、非常の嚴寒なるとを豫定してさしつかへなし。

第七魚狗（一名シヨニ）と云ふ鳥の容をかくし、鶯の多く顯らわれて鳴く春は、大ていは好天氣也。

第八蜘蛛が長かき糸を引きて巢を造くれる後は、十日乃至十一日は晴天なるべし。たとひ少こしく雨の降りつゝある最中と雖へども、蜘蛛が巢を造くりはじむるときは、程どなく晴るゝと信じ、たのみて待つべし。

第九蛙のがわ〳〵と多く鳴く曉は、多く雨降りなり。

第十月の周圍に輪の出來し後は降雨すると多し。

第十一蟻が穴の中に引き籠りて出である時は、降雨の

前兆也。

もはや入梅も近かづければ、洗濯せんとする人と遊ばんとする人々の、天氣を豫知したく思ふもの多くなるべし。その時は通俗天氣豫報が天務を盡くすべき好時期を。されど當るや否やは保證のかぎりにあらず。

病後病院

一時の心配に引きかへて、今の喜こびにまぎらされ、所謂喉元と過ぐれば、暑つさ忘するゝと云ふもの、病後の常躰にぞゐる、餘まりに喜ろこびの餘まり、大切なる病後の快復期に當たりて、養生行き屆どかず、折角癒せんとせる健康を、再び惡しくして、所謂ブリ返しなるものを來たして、前よりも一しほ惡しくなることは、少くなき咄しにあらず。是れは誠に悲なしむべく、且つおしきかぎりなれば、米國等にては、早やく已でに『病後病院』なるものを設立して、汎ねく病後虛弱の病躰を看護し、元との健康に快復せしむるよしなるが、我國の如とき未まだその備のなき國にては、各々の家の主婦たるもの、兼ねて病後病院の院長の心得を心得とし、もし大患の者を出せし後には、是れが監督はおちなく注意せざるべからず。この病院にて注意すべきとは數あれども、その中にて最も大切中の大切とも云ふべきものは、食事と安睡と運動也。

この三者は誰れの躰にも必要なるはさるとながら、病躰に於けるその必要は、藥よりも醫者よりも、凡べてに勝さりて必要比らぶべからず。何の病氣をとはず、大病の後には俗に所謂「かわき」なるもの起こり、健康の度に比して割合多ほ過ぐる食物を欲しがるを通常とせるが、看取るものなきより未だ弱わき胃を害し、恐るべき大病にもとるもの多きは、第一の注意の點とす。されば如何にほしがりたりとて、一時口腹の慾に引か

れて、取りもしもつかぬ大難を起こすを思もはゞ病後には極めて消化良き食物を適度を計りて勸むべし。
次ぎに過ち安すきは過度の運動也。病中他出できざりしに、かく今日の自由を得たるうれしさに、寒天濕氣の別ちなく、時間の過度なる心配もせで、無暗の運動を爲すより、或は疲勞を來たし、もしくは熱發し、時には寒冒する等の患をなすものあり。その患は今ま更ら喋々する迄もなし、たゞ看護者の注意の必要を云ふのみ。
又た病後者のために最も大切にして、最も忘すれ易すき一事あり。これは衰とろへたる躰と衰ろへたる心を養しなふと也。物のわかりたる平生ならば何とも思わざる位の些少の事も、衰ろへたる人のためには、意外に強よく當たる事あり。故に病後の者は小供と思ひて取扱ふべしとは、病後病院看護者の心得なるが、殊とにも腦に關係ある病症、或は血液に甚だしき變動のありたる病後等は、一しほ注意を要すべき也。其の注意のなきより産後に不眠病神系病等を發するもの多きはその一例也。
病後看護者の忍耐すべきは二三ヶ月也。病後が食を節し、安睡を適度し、運動を加減するも二三ヶ月也。僅か二三ヶ月の事を忍耐なさずして、數ヶ月數年將た一生不治の大難を來たすは、そも愚かなる事に非ずや、コレラもおい／＼蔓延の徴あるに當りては、大病人病後の心得は時節がら必要忘するべからざる事なり。

手藝案内



一種の縫取

ぬひ取りの案内は屢々本紙に記したるが、玆に新しき一種の縫取を栞すべし、これは近來西洋諸國にて盛に

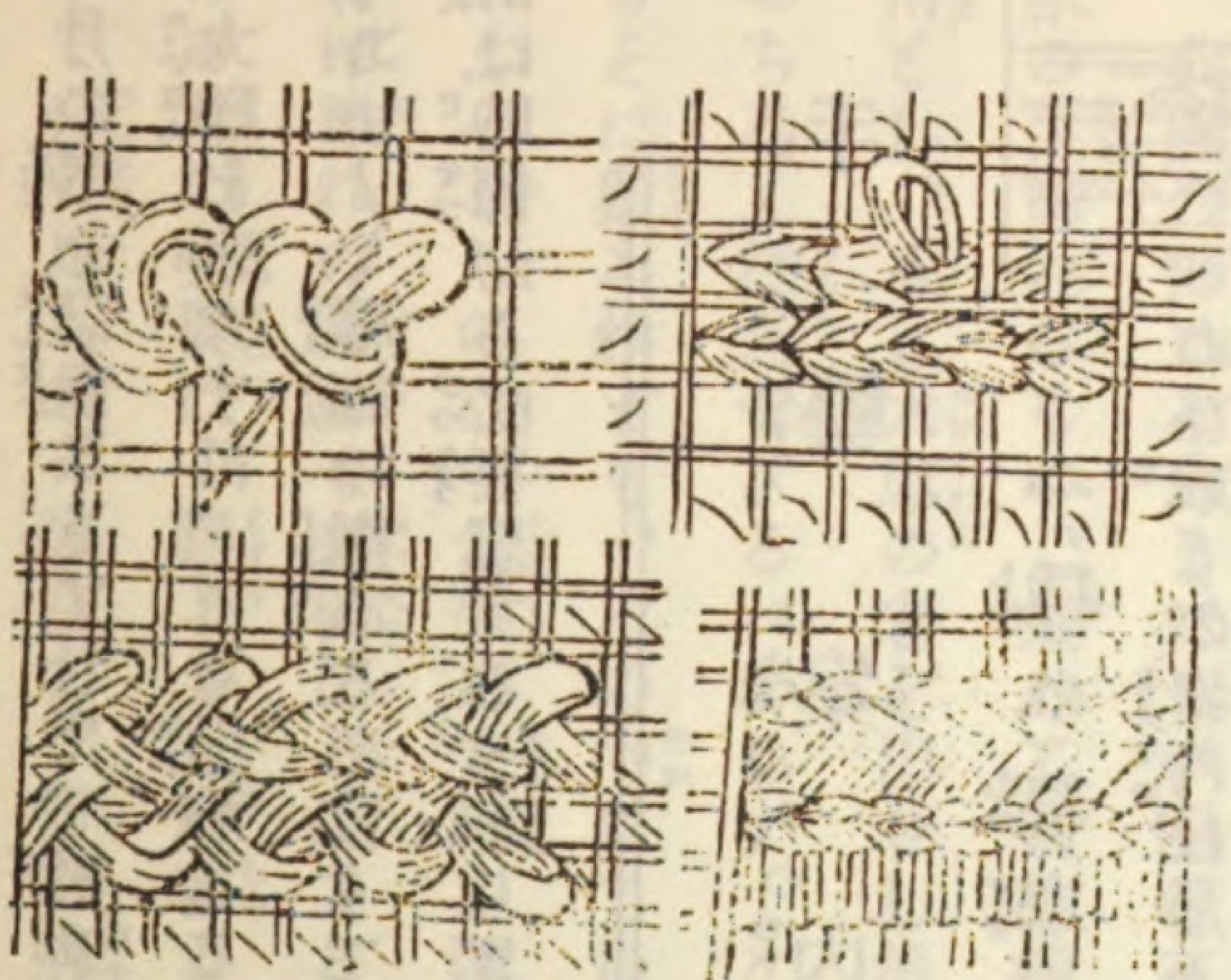
行はるゝものなり。

一種の縫取とは目の粗き布の上に種々の縫取細工を試みる手藝にして、縫取に心ある人は何人も容易に試み得べき業なり。

此仕業に要する材料は、試むべきものに要するだけの粗き目の布切と、普通の縫取針と毛糸又は絹糸を以て足れりとす、此道具にて粗き目の布切に縫取するは、其仕上りの美麗なるのみならず、他の縫取に比しては、實に信じかたきほどの迅速にて見事に出來得るものなり。

其の縫取の方法は最も單簡なり、少し大きなる仕事ならば縫取臺の上に布を張り、これにて試みされば不可なりと雖も、一寸した物には縫取臺を用ゆるに及ばす、膝の上やテーブルの上にて妨なし、併し其臺の上に載せて正式に經營せば之に越したることなし。

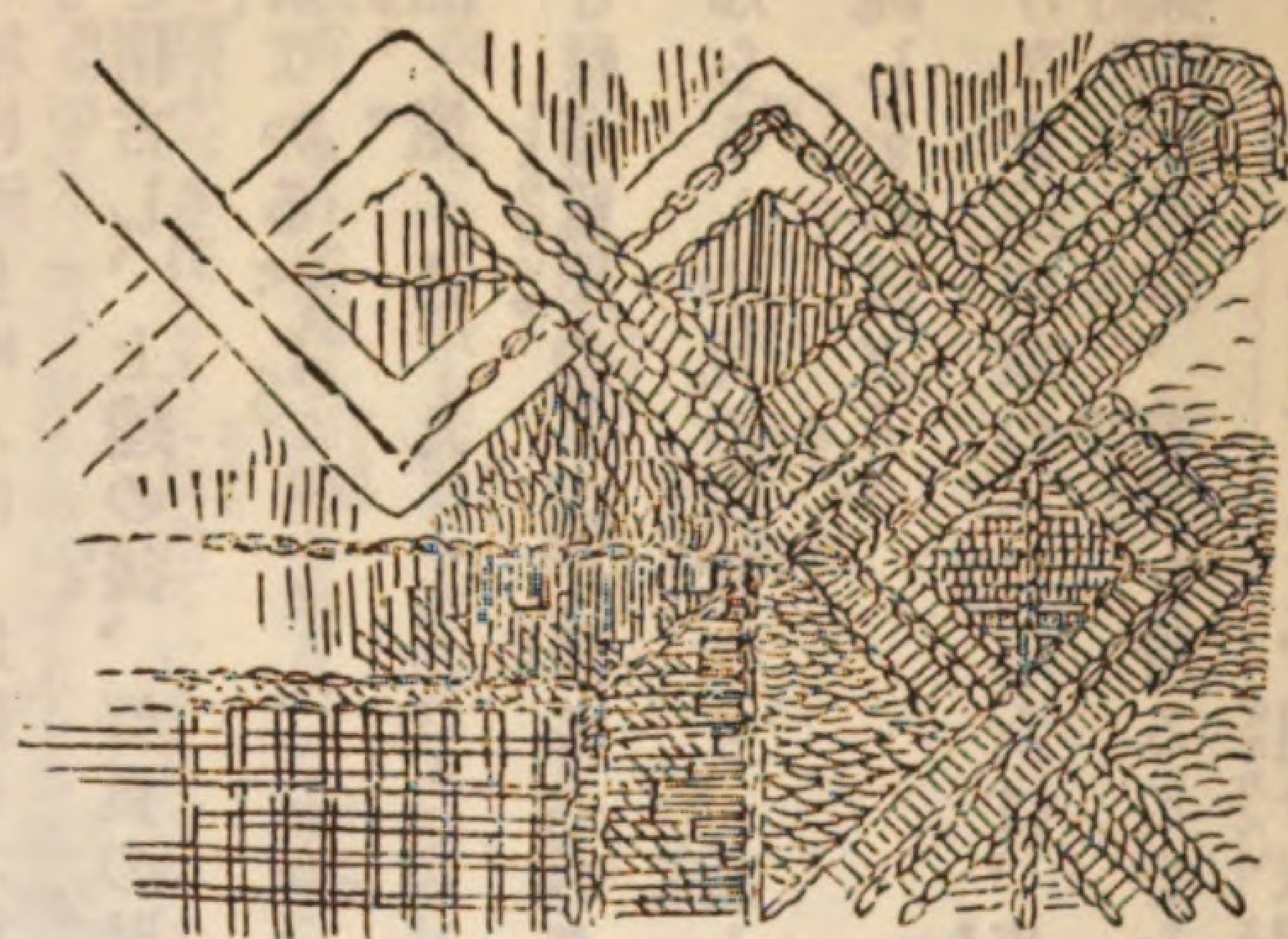
一々編法を文章にて説明するよりも、挿畫によりて明にすべし、第一圖に示せる四個の編法の中にて上部の



第一圖

一個は單一なる連鎖を示す、これは其布の目（則ち穴）に一つ宛或は二個或は三個を一時に縫ひ取りたるものにして、眞直なるもあり、雁木形なるもあり、種々なる編法に縫ひ行くこと自由自在なり、右側の下部にあ

るは、布目二個にかけて相互に縫ひ行くものと知るべし。



第二圖

第二圖に示せるは、窓掛の縁なり、圖に示せば隨分精密のやうにもあり、又面倒のやうにて素人には出來難きやうなれど、此圖の示す形線に從ひ縫ひ行けば左まで六かしきものにもあらず、冬ならば毛糸か若しくは木綿或は絹の色糸もて色彩の配合を能くする時は隨分美麗なる窓懸の縁縫が得らるゝなり、併し地が何しろ粗き目の布にて薄地のものなれば、夏向に適す、故に冬の如くいろ〳〵の色糸を用ゆるは、熱くるしかるべし、淡泊なる色か又は白の木綿糸若しくは麻糸を用ゆるが宜し。

手藝に志ある細君ある西洋人の住居に行けば、近頃此縫取を夏向の装飾品に用ゆるもの往々之あり、「ランプ」敷又は置物敷は殊に目立ちて美麗なり、其型と摸樣はいろ〳〵あれば、一々之を記すに及ばず、此手藝を實行せんと欲する人は、試みに自分の好める摸樣を案出し、其線によりて前に述べたる縫取を試みらるべし、何しろ地が粗き目の布にて、構子を形づくり居るものなれば、小女の手にても容易なるべし。

我國にても之と暗に符合したる縫取見受けぬ、开は羽

二重又は麻地の經緯の線を脱ぎて粗き目となし、之に自分の嗜好より成れる摸樣を絹糸又は毛糸にて縫取を施したる半襟なり、其摸樣を淡泊に撰むに於ては、厚向には最も恰好せり。

未だ熟練の域に至らぬ人は、地粗き木綿切に木綿の糸にて縫取を稽古し、上達の後、好甚の裝飾品に手をつけなば失策なかるべし。

油屋さん

油屋さんとは商賈屋の名稱と思ふべからず、東京の婦人の能く知らるゝ小兒の腹當なり、蓋し其形油賣の腹當に髣髴しをればなり。

未だ聞わけなき三四歲の小兒小女は、炎暑の候となりては甚だ裸躰を喜び、衣服を着ることを厭ふ、且つ泥あつかひ水あつかひなどして、隨分衣服を汚し或は濕し世話をかくるものなれば、此油屋さんの必要を生ずるに至るなり。

さて此腹當の製作は、甚だ簡畧なるものにして、三四歲の小兒には木綿巾三尺もあらば充分なり、先づ胸部と腹部を蔽ふ通常の腹當の如く一尺七八寸の木綿巾を取り、其餘のものを半折して木綿巾の半巾とし、之を兩側の襠とす、則ち腰の周圍を蔽ふもの、之を身ごろに兩方縫ひつくれば、全く腰部を包み隱す、兩の腕こそあらはれつれ、其外見も見苦しからず、又衛生の旨にも適ふ。

之に用ゆる布帛は成るべく白の木綿をつかふに如かず、白木綿にては興味尠からざれば、浴衣地に用ゆる眞岡か、手織木綿の何か柄あるものにて製さばいくら洗濯しても差支なし、素より小兒は悪戯を好むものなれば、腹掛の汚穢するは覺悟の前にて、屢々洗濯して遣るべし、一反の布を取らば、一ッ身と三ッ身を取つたる殘餘にて充分に一枚の腹掛を得べし。

小兒の腹掛なれば、地味又は細き柄合は面白からず、

荒つばいものが可愛らしくてよろし。

社交一班

流行の栞

男女の夏衣

春夢

古歌に、「何事も時ぞと思へ夏來ては錦にまさる麻のさごろも」とあり、これは夏の流行衣につきて最も其要を示したるのみならず、人々左右の訓戒とするに足る、されば夏の衣物は成るべく涼氣にして、成るべくあつさりしたるを選ぶべきはこゝに改めていふまでもなし、殊に男子用は最も其然るを見るなり、先づ男子用には上等を薩摩上布つ其實は琉球産に上等品に至りては一反二十五圓三十圓なるものあり〕藤摩絣、なんどとし、平民的ならば阿波ちゞみ一反四五十錢をひつかけても、矢張生活しいかるゝにあらずや、一言せば男子の夏衣は單衣に紺絣、浴衣に眞岡木綿に限るなり。

女子に於ても然り、木綿縮、木綿しぼり、眞岡は夏の平生着にして、外着には從來は明石縮なりしも、昨年よりは越後より數寄屋縮緬を製出したるが、其流行頗る盛大を極めしも無理ならず、第一其織方の上品にして面白き珍柄あると第二は明石縮に比して直段の割安なればなり、余は詳しく世間を觀察して後號に於て細說せんと欲す。

余は某吳服屋の報告を掲げて讀者の參考に供せん。

男物羽織地は絽が最上等、方今絽には種類幾通りもあり霞絽綾絽市樂絽立絽等なり何れも黑紋付にて紋は普通三ツ紋なれども昨今五ツ處紋も大に流行す大きさは曲尺一寸一二分縞物は縞絽、壁上布、撚上布次は透哉なり、其直段ば白絽は普通品五本絽にて四圓より六圓まで上等七本絽にて五圓より六圓半位ひ其餘は凡そ六圓五十錢より七八圓位まで黑紋付染代は普通紺下にて一圓中一圓半、上二圓、縞絽は五圓前後より六圓五六十錢位まで、壁上布及び撚上布は四圓位より五圓前後透哉は二圓二三十錢より、練糸上等ば二圓七八十錢止り、扨て又た女用單物は御召小紋、御召風通織など目下最さも流行す次は銘仙節糸壁縮緬(瓦斯糸)入新縮緬等なり色合及び縞柄は銀鼠地又は藤色地薄小豆櫻、鼠薄利久等、小紋風通等の摸樣地味の者はうす福市松斜通し分銅小紋等にて若き婦人向きは藤色或は櫻鼠等の矢かすり、紋摸樣に立枠菊摸樣花摸樣等なり他品も同じく右の薄色物なり價格は御召桐

生產にて七圓前後、小紋御召及び風通織は拾圓より上等拾三四圓まで、銘仙は前價格にて女物には薄色絣紺御納戸等あり代價は五六圓、壁縮緬（ガス入）は三圓より四圓前後まで新縮緬二圓より二圓八九十錢、女物帷子上等品は都花織、明石、壁透哉、次は普通透哉、價は都花織は七八圓、明石は五圓六七十錢より六圓五六十錢、壁透哉は四圓二三十錢より五圓五六十錢、普通透哉は三圓四五十錢より五圓位まで即ち諸品とも價は概して一割方の强氣。

戰爭の先行を氣遣ひて一時仕込扣をなしたれば市中何れの呉服店とも昨今荷少なきを感ずる氣味にて相場は昨年當季賣出し頃に比較すれば平均一割方は騰貴し居るべし地柄及び直段付の概況を擧れば女物流行染形は地白に濃花又は御納戸にて形を出し牡丹、菊の花、亂桐、古代摸様絞り摸様、鳳凰、疋田鹿子の松竹梅などの諸摸様を置たるは柄行高尚にして華美に令嬢さん向き娘向いろ〳〵、年增向き柄行の地味の物にいろ〳〵あり即ち御殿鹿子、疋田鹿子、鹿角菊、さくさ、細棒の手綱、五厘當分横棒筋、五厘當分立棒、升崩し、薩摩縞毛萬筋の諸摸様、此の外瀧筋、大薩摩縞、手綱、牡丹崩し、疋田鹿子縱染、朧形疋田市松などの柄のズットと華美の物は藝人向き女物染形の中向は男物柄行と同ト、次に男物流行形は升崩し、地白薩摩、横棒、立棒、手綱、薩摩縞、毛萬、細格子、ヨロケ棒の諸摸様なり扨て直段は眞岡木綿地本場染御納戸形は反八十錢より一圓まで、濃花色形は九十錢より一圓二十錢まで又木綿縮地はヤヽ高價即ち御納戸形は九十錢より一圓二十錢まで濃花色形は一圓以上一圓四五十錢止、印度產染草染上の品は前記本場染の物に比較し賣價御納戸にて一割濃花色にて一割半安、以上高價染形物の直段付けなほ反物に到りては相場四十五錢より五六十錢まで品行數十通り。

一躰に絞地浴衣類は關西に行はれず東國筋に重に流行する者なれども本年は戰爭を氣搆へて本場有松地方は仕込元を控目にし例年より凡そ三分方は荷容の確に減ト居る處へ京都大博覧會の開會に依り同地方へ向け行し荷數も少なからざれば昨今市中は取別け荷廻りの薄きを感ずるの氣味なり特に目下浴衣類の中絞地は賣行目立て宜き様子なれば此分にて押行きなば冬場仕込の染形物は遠からず賣悉くして品切と成るべしと、扨有松絞は紺絞白絞とも男女向新形の摸様いろ〳〵あり婦人向柄に相變らず大人小人を通べて總紺大白拔飛鹿の子類（即ち紺地絞り）直段は反一圓三四十錢より二圓止り、繪羽（紺地に諸摸様を置き仕立揚の上摸様の綱合せ整ふ染方）には中々高尚の柄行あり價は一圓七十八錢以上、白地紋に六七十本竪筋もの間置登老の變り柄又風に吹

入の大小綛り柄其外二度絞り三度絞り柄行き幾十通り價は七八十錢より、一圓二三十錢止り男向き柄行上等の分は竪筋微塵飛白絞類價は一圓内外、又茶屋料理屋向貸浴衣地ば柳絞又は大筋絞價は五六十錢より七八十錢見當、小供向紅地絞は柄行取合せいろ〱價は三四十錢より七十錢位まで昨今諸絞地の中紅地鼓も賣口宜し賣揚五分の一は即ち紅地なりと。

流行の手提及銀貨入

現今は西洋袋物大に廢れて日本的の袋物大に流行となれり、近來男子にても女子にても手提は革鞄を持つもの從來の如く流行せず、其代りに『信玄袋』大に流行の域に達し、これは二三年前より弗々行はれ始め昨年の末より追々流行隆盛に赴きたり、(信玄袋の流行すべき傾向あるは昨年の當時の家庭雜誌に一寸記載し置きたりと覺ゆ) 此工夫製造家は新橋南金六町佐竹商店にして、此手提となりたる重なる理由は、其形の風雅なりと、其袋の口の開閉自在なるにあり、



布品地は婦人物にて繻紗又婦人兼男子持には高麗木綿なり(一圓五拾錢位なりと)

近き頃より同店にて此『信玄袋』に擬し、銀貨を工夫發賣せり、其形は『信玄袋』と共に挿圖に示したり、即ち挿圖中の小形なるものは、此の銀貨入なり、僅に近來の發賣品なりと聞けども、此品を使用するものを多く見受けらる、余の日に觸るゝものは、繻紗、高麗織、更紗いんでん革等なり、『信玄形』を縮めたるまでなれば、其形と趣向につきては別に言ふ所なしと雖も、風流にして可愛氣なるは『信玄袋』に優るとも劣ることなし、(代價は三十五六錢より四十五六錢までなりと購求したる人に聞及べり)

簾と葭子

已に季節にも向ひし事なればソロ〱客の買足の付くべき筈なるに昨年に比べ賣口ヤヽ遲き氣味なるは必竟世の景氣付かざるに依るべし賣價聲は中々に氣強し昨年とは凡そ二割方の相違なり本年竹、糸の價の揚り方は非常にて竹の如きは五割方、糸類は二割方の騰貴なり葭の如きも昨年夏日照勝の響にて生育惡く嵩容少なければ是れ亦從つて仕切價に氣を持てり要するに簾、葭簀とも仕入元の價の格外揚りしに較べ今日の賣價は寧ろ尚ほ安價と云つて可なり然れば此先き次第に世の景氣付に持込み炎暑續きの日和と成れば無論賣價は今日より尚ほ多少引しまる可き

か扱て目下賣出相場の一二を擧れば青簾一間四方五十錢より六十錢まで大小の形は之に準じ夫々相場の立こと知る可し葭簀屏風二ツ折三尺より三尺五寸位の處ろ三十五錢より四十錢まで、葭簀戸一間二枚立一圓より一圓五六十錢位まで品は幾通りもあるなり

岐阜提灯

戰爭の成行を氣遣ひて一時仕入荷を控目にせし氣味なりしが媾和使沙汰の起し後は世の靜平に復し市中の景氣付を慮り俄に仕入增を成す事と成り特に昨今は賣出季節にも近きし事とて製造元へ日々に電報を打て送荷の注文を成し旁々催促を成すなど府下の販賣元は諸手配に忙はし本年の仕入は昨年中の總荷容に比較し二割方增したれば都合四萬個以上には及ぶ可し年來の例に依りて其半數は地方への廻り荷とすれば市中の賣荷は即ち二萬個前後なり府下及び横濱の諸賣店は未だ悉く賣出しはなさされど相場は已に立つ先づ中形一個廿五錢、卅五錢、卅八錢位の處より次第に登り別撰三圓、四圓、五圓位までの小賣價なり仕入元は諸式の高直と手間賃の價上とに依り昨年に比し凡そ二割方は元に喰込みしよしなれど賣前は變らず品落もなしとは販賣元の奮發と云ふべきか提灯の繪模樣は例の花鳥諸草類の外仕入荷の一割方は戰爭に因し繪柄なり

幽禪染

幽禪染は年々染色、模樣共精巧を極め、此流行我東京にも日を逐ふて盛なり、其製造元は誰も知る西京なり、されば今本年京都に開ける第四回勸業博覽會工業舘に出品せし幽禪染は如何なるものなるか、及び之に向つて國民新聞靖眼生の品評を採錄す。

友仙染は京都の得色なり其精巧なるものに至つては實に驚くべき逸品を見る、

今この友仙染のうちに於ても例の自稱的美術品となすものあるは免れず又多く氣取り粹がありて却て折角の趣味を害するものもあり、

友仙の模樣に至りては近時大に發達して其畵の妙を擧むるに外なく在來の模樣的の者は少しも見ずして大躰は繪畵的のもの多し、又今度出品せられたる友仙染は總て斬新なるが如く、又粹といふべきものか、されどこれらが却て一歩過ては前述なしたる、趣味を失するものなり、

又當時を觀察なして日淸戰爭の圖などの友仙に至りては毫も精巧たるべき物品を見ず大躰は卑俗にすぎて惡し、その見る所のものに止まりては如何にも苦し味ありまだ蒼鷹の檣に止まれるなどの圖は見るべきものあり、宇野常七、中川理七兩氏の出品は同畵題たれども其圖を異にす宇野氏の圖は檣柱三本を見せ檣綱烟突艦橋まで描き而して蒼鷹は上に飛翔す黑烟は蜒々と横になびけり、中川氏は檣柱は僅は一本にして大きく中ば書

き消し下半は青波の模様震盪は柱邊に躍れり、二者相比して前者は圖様密なり、後者は疎なり、されど軍艦は高千穗なり故に檣柱は三本ならず同軍艦は二本柱のものなれば事實さしては後者のもの勝れり又摸様さしても後者のものたり畫さして見るべきは寧ろ前者のものならんか兩者共今一層意匠の妙さいふべきなしかゝる規律ある畫題は意匠をこらすべき所ろなけれども又巳れが工夫を以て布置等に心を用ゆれば可なり、

されば友仙染は多く繪畫的にして優美高尙なる摸様的のもの少なきは誠に遺憾なり然れども又繪畫を摸様さして應用なしたらば又妙なるべし出品中多く繪畫を摸様に應用するなるべけれど多く卑俗に流れ又は着眼を誤りたるもの、此二者の弊を免かれざるもの多し

先づ摸様さして見るべきものは、林ひさ氏出品の黑地半面染赤のひつた方、藤の摸様、是れらは高尙にしてよし又 配 色もよろし黑赤紫等總て熟色のもの多くして目立つ友仙は最もこの配色に心掛けざるべからず尙同氏出品のものおほむね摸様類を專一さしたれば多くの友仙染出品中繪畫的のうちに一種見榮へあり然して摸様的友仙のその他多くありしかご以下は略す夫れより、摸様的繪畫應川友 仙 染にては宮本儀助氏出品黑地に雛菊の摸様地色の黑に對する菊花の白色、雛竹の緒色に對て菊葉の青色なる皆配色に叶ふ上品なる模様なり黑地友仙は如何にも高尙なりされど販路向には定めし惡からんが、此摸様のうち只一つの欠點は、昆虫のあしらひあらざるを恨む、而してこの圖には鳥類は決して用ゆべき處にあらずもし夫れ鳥類を用ゆさせば全局の畫面大に繁雜を極るならん、穩靜なる圖を傷づくるならん、昆虫を附しても亦然るべしさ云はんか、否々然らず草花のみにて生類のなきは圖畫に活動なしかく靜穩なる圖に對するに可憐なる蝴蝶を以てせば大に品位を高からしむるならん

梅原長兵衛氏出品扇子ちらし觀世水の摸様光淋風にて最も適當なるものなり卑俗に流れず上品なり是れまでこの扇子ぢらしの友仙摸様實に多く見る所にして又多く光淋風の畫を摸擬すればこの扇ざらしは扇子にて世に多くあるものは扇面なり骨のあるもの少なし又おほむね草花を附すさいへどもこのものに至つては草花は少なく反て霞引又は摸様もの多く繁雜にあらすして瀟洒にてよろし、されど是等は最も配色に注意せざるべからざるものなり、尙扇面に雲形のぼかし或は砂子振等ありてもよろしからん、終りに今一言す、扇ぢらしは大てい光淋摸様に一定せるかの如くに思はる故に扇ぢらしにて他に趣向ある摸様新案すれば已れの技倆を表はすによろしかるべし奈良繪或は色ゝ取まぜて摸様に附しならば一層の光彩あるべし

市田彌一郎氏出品の友仙染は其摸様、斬新なるべけれど是等は、其人々

の好嫌には最も重大なるものなるべし、又卑俗に陥いりて大に忌僻を蒙むるならんもこれは又反て上品なり、圖様は地一面藍を以て條目を引きこれに飛模様の趣向にて圓形の札を置く圓形の札にはそれ〴〵古近の俳優の似顔を色入りにて仕立つ十六むさしの意味、これらは反て日清戰爭を當て込みてわけはつかぬ友仙よりは遙に新趣向にてよろし、又清酒たり、芝居道藝道の先生がた或は好んで購求せらるゝならんか、

内貴清兵氏出品は數多あり、中には、市田彌一郎氏と同意等に出でたるものは團扇ちらしにて年代々の美人風俗畫を極密色入りにて描く、意匠もよく、又友仙としての圖柄には適當たり、されど梅原氏の扇面に比してはやゝ品を失する所あれど世はこの方を多く販路するならん美人風俗畫は東京青年畫家水野年方氏が嘗て此の風俗畫を一枚摺にて出版せしをあり之は之れを模本として模様に附したるなるべし、尙某の出品にてやはり江戸畫ちらしともいふべきか、右田年英氏の一枚摺の歴史畫を模様に附したるありこれも前者と同意なるものなり、内貴氏出品にて黒地友仙模様又は紫地松がたの模様等の友仙に至りては、實に精巧といふべきものなり、

岩田忠兵衛氏出品是等は在來の友仙模様にてやゝ其の風を新たにしたるもの、圖は最も巧き松竹梅に飛鶴なり、總一面試筆の飛鶴を小さく描きその間に青色を以て松竹紅色を以て梅花を附す、飛の白きところ青松紅梅と相配合して配色はよろし又模様としてあまり錯雜せずして上品の總模様たり、反て粹がり意氣がり又は何んとかして斬新なるものを作らばやとして奇なるものを作るよりは遙かに優れり、是等の圖題は最も巧きものなれど模様の附けかたにて存外面白きものを出すなりあながち窮屈題なりとて一がいにひんせきすべからず

西村治兵衛氏出品は、内貴氏の團扇ちらし風俗畫と同意のものにてこれは十二月古色紙ちらしなり色紙は古色を附し其他の間もうす色にて染め上け虫くいなどの所最も注意せり、是等は模様的高尙のものなり、内貴氏のものと相比しては勿論色紙ちらしの方優るものなり、されど一躰に色氣少なく古色などの附したるなれば配合ゆるし故に紙色ちらしの間に一二枝の草花を添へたらば其草色の色目を以て引立つならん、

此他、この類の友仙染最も多く、團扇ちらしに光淋の摸様或は三十六歌仙、又は御所車づくし貝づくし、是皆友仙摸様として適當のものなれど多くは古畫朝のものを好み色どりもわざと澁味を第一とせしものなれば配色の點最もゆるく爲めに引立たずそれよりは反て、景色畫の黒繪のまゝのもの友仙らしくてよし景色は大林嵐山松島宮島又は京名所等にて雪中などに至りては實に清爽にして友仙畫に適當のものと云つべ

し農商務大臣の御注文になりし雪中の知恩院の圖は精巧の者といふべし又腐岡伊兵衞氏出品の雨中に撫子の友仙染は實に綺麗としてよろしきもの毫も友仙と見へず是れは反て見る人少なく俗人の受けはよろしからず單にあつさりとしたるものと見過すなり、僻眼生は是等を好む實に友仙染は京都の得色たるに恥ぢず

尙出品數多あれども何れを見ても實に結構なる精作なればいづれも〳〵惡るがらう筈なし又半襟類の摸樣は上品なるを旨とし少さき飛摸樣を第一となしける故にや總て色も流行につれて同色のもの多く摸樣も隨て意匠を加へしものとてはなし、

布裂類の摸樣は近頃大に斬新なるを見るに至る、目出度ものに用ゆるにも日の出での染方又は橡少稻の畫も極て高尙なるを旨とする爲か錯雜なる圖なし鹿、靈芝或は月等の染方、摸樣誠に精巧併し是等の布裂にても多く古畫を採用し探幽雪舟等の筆の羅漢畫等、を見るはよし然れども出品物中普賢文殊の二布裂に文殊の象は在來の白象にてよろしけれど普賢の乘りたる獅子の唐獅子にあらずして當今の獅子となしたるは大に意匠を加へ斬新なるとこそは知られど兩樣相對してのものなれば是れは在來の唐獅子の方しかるべし、

いづれも染方の精巧なるは他より及ぶべき事にはあらず、

こゝに一言當局者に尋ねたきは出品友仙染のうち紅入りものにて金糸を最も多く用ひて摸樣に附したるあり是等は何處の方面に販路する者にやかゝる品を使用すべき道の者あるならんか如何にしても一見卑俗極まるものと思ふ金糸の色の加減か果た又其色の配合に用ゆるに拙なるが爲めか僻眼生は大にまごへりかゝるものも其一端に列するものなるやを配色染法等よりして金糸使用の改良を試みていはかんこゝに一言申て當局者の敎を乞はむのみ、

京、大阪、神戶、長崎の流行

友人藤居首酔用を帶びて朝鮮に赴く其途上見る所の風俗を寫して余に寄せらる則ち餘して讀者の劉覽に供す。

「京都、大坂、神戶市に於ける流行は、矢張東京と大差無之即ち男子は市樂織の小袖に、同物の羽織、又は結城紬の上下にして婦人は小紋織の御召、若しくは肉色、柿色、淡藤、鼠地等の小紋に三ツ紋、五ツ紋を染出し、若か紋もの大なるを着し居り冬者を最も多く見受け申候、帶も東京と異なるなく男子は、博多、婦人は繻珍に限ける樣にて、特に友地模樣を多く締め居り候、

神戶市を回巡致し候節、婦人の帶に注目致し候處華美なる模樣の友仙縮

緬最も多くこれは馬關、長崎も又同樣に有之中に随分目に止まり候は婦人の着し居候衣服の裾まわしに御座候、妙齢の娘子等は紅、藤色のメリンスにして、年增連は紫のメリンス又は同色の毛繻子を附居り候次に國民的の衣服は多くは手織縞の木綿にして中には二子織を着し居候者見受け候へども東京程は流行致さず樣々御座候其他半襟の一般に年に比して華美なるには面白く御座候」

日用品物價　（六月五日）

白米小賣（一圓に付）㊀一等白米八升一合㊁二等白米八升四合㊂三等白米八升八合㊃四等白米九升一合㊄五等白米九升五合

◎鷄卵（千個に付）　天切本〆十四匁十三圓二十錢ゟ十三圓三十錢同名目十四匁廻り十三圓七十錢ゟ十二圓八十錢大玉本十二匁〆十一圓四十錢ゟ十一圓五十錢同名目十二匁廻り十一圓ゟ十一圓二十錢中玉上中九圓八十錢ゟ十圓同並中九圓四十錢ゟ九圓五十錢並玉並上八圓七十錢ゟ八圓八十錢同下並八圓四十錢ゟ八圓五十錢上海玉（一函に付）三百六十入ゟ四百入迄品なし

◎鹽（相場一圓に付）　赤穗鹽三俵九分東濱純鹽三俵八分改良八家四俵改良大鹽四俵本場五俵五分五厘改良新齋七俵同色附物七俵五分古積上三俵一分同並三俵二分五厘

雜錄

吾が海軍水兵の歌

國木田哲夫

左に揭ぐるは、吾が國海軍の水兵等が好んで歌ふ離別の悲歌なり。

今度此のたび　國のために
遠くへだてゝ　西にゆく
國の爲なら　是非もない
主としばらく　袖わかつ
主も其身を　大切に
又たの逢瀨を　待つ計り
黑き煙を　あとにして
波をけたてゝ　出てゆく
空にそびゆる　富士の山も

消へてあとなき　千里海
四面の眺めも　絶へはてゝ
羅針盤一つを　たよりゆく

此の歌をたゞ此のまゝに素讀せんか、何の面白味なきに似たれども、これをかのロングサインの調に高唱し來る時は、壯士膓を斷つの思をなす。

ロングサインとは英國水兵が古來より愛唱する離別の歌なり。其の調實に悲壯と極む。吾國海軍の樂隊も亦た此の調を用ひて離別の際に之れを奏す。則ち右の歌は此の調に合はして作りたるものなり。

去年七月の下旬、我國の艦隊愈々勢揃ひして黃海向て乘出すの際、佐世保軍港に響き渡りたる樂は、進軍の調及び、此のロングサインなりしなり。

大山第二軍々司令が威海衛攻擊の大任を帶びて廣島を出立したる時、宇品港に響き渡りたるは又た此のロングサインなりき。

多年の苦學こゝに目出度く終はり、愈々江田島を出で、待ちに待ちたる遠洋航海の途に上ぼらんとする彼の年少有爲の士官候補生が、今更ら大洋を望んで斷膓の思をなすもの、又た此のロングサインなり。止まる益荒男行く、武夫共に手をもて相抱きて叫ぶも亦た此のロングサインなり。

而して之れ各國の海軍々人皆な然るなり。

彼の歌の文句少しく野卑なるが如く思はるれども、若し此の調を以て歌ふ時は、海上生活の兩面を詠じ得て悲壯此の上もなし。『悲壯』則ち海上生活の眞面目なり。一方懷鄕の哀情悲しく、一方萬里の波濤を開拓するの壯心勁く。若し夫れ、

空にそびゆる　富士の山も
消えてあとなき　千里海

と歌ふ時は、水兵甲板に立ちて、『嗚呼終に富岳見へずなりぬ。懷かしき富岳いざ去らばと』、叫ぶの時なり。

更らに進んで
　四面の眺めも　たへはてゝ
　羅針盤一つを　たよりゆく
と歌ふに至りては、悲壯の極、調子沈みて又た上り哀情激して希望生ず、漫々たる大海已に限にさへぎるものなし、いざ然ば羅針盤一つをたよりとして千里萬里波の限ぎりに走らんかなど海人得意の絶頂。
此の頃小學校生徒が歌ふ唱歌のうちに
　富士のすそ野に　降る雪は
　孝子ふたりの　袖ぬらす
　、、、、、、
といふがあり。ロングサインの調は此の歌の調と同じ謂なるが如し

千利休
《口繪の繪解き》

傲骨世に高く、豐太閤の勢威を以てして猶屈する能はざりし茶人千利休は、世の能く知る所也。
彼若かりし時或時師より庭前の掃除を命ぜられしことありしが、彼は輙ち箒を把りて行きしに、庭は掃除已に成りて一點の塵もあらざりけり。
是に於て彼は爲らく、『是れ師が我を試みんとする也』と。乃ち木の葉二三點を落し、來て掃除の了りしよしいひければ、師行き之を見、大に其奇才に驚きしといふ。
彼が傲骨此時よりして、已に其端を見るべかりし也。

時事一斑

兩陛下の還御
五月三十日天皇陛下は東京宮城に御還幸あらせられ、三十一日は皇后陛下御還啓あらせられたり。東京市民は非常なる喜を以て奉迎し、人出無慮三十萬と稱せられたり。

西園寺文部大臣の教育意見

西園寺文部大臣去月廿四日各高等學校長尋常師範學校長を官邸に招て告て言へり。

運動を進暢せんと欲せば、强健なる國民を作らざるべからず。强健なる國民を作るには躰育衛生を盛にするを要す。

養良なる國民を養成せんには、婦人の力を藉らざるべからず。西洋諸國に於て女子教育に最も力を用ふるは之が爲なり。

外國との關係は益々頻繁を加ふるに至れり。大に外國語を奬勵せざるべからず。

文明の進歩は非常の長足なり。內に安じて外を顧みず、徒に口大和魂を唱へて世界文明の大勢に隨伴せざる如きは、余の甚だ取らざる所なり。

武備教育

日本に於ける武備教育をなしつゝある學校下の如し。

但し明治廿年末の計算也。

陸軍

(校名)	(學期)	(教師數)
陸軍大學校（高等兵學）	三年	二十四人
陸軍砲工學校（砲兵科 工兵科）	三年	二十五人
陸軍士官學校（歩兵科 騎兵科 砲兵科 工兵科）	一年七月	百一人
陸軍幼年學校（軍人豫備教育）	三年	五十三人
陸軍戸山學校（戰術科 射擊科 躰操科）	六月若くは七月 七月 四月若くは五月	四十一人
陸軍乘馬學校（馬學、馬術訓練）	十月	（廿六年末）八人
陸軍砲兵射的學校（野戰砲兵射的術、戰術）	三月	五人
要塞砲兵幹部練習所（要塞砲兵學術）	學生一年 生徒一年十月	十三人
陸軍經理學校（監督教育科 軍吏教育科）	二年 十月	七人
陸軍軍醫學校（軍陣衛生學 軍陣醫學）	四月以內	二人
陸地測量部修技所（陸地測量官養成）	學生二年 生徒一年	一人
海軍		
海軍大學校（將校科、機關科、軍醫科、選科）	將校、機關科一年六月 軍醫科一年 選科無學期	十三人
海軍兵學校（砲術、水雷術、運用術、航海術、機關術、造船學、普通學、法律學）	四年	廿三人
海軍機關學校（本科 專科 機關工練習科 技手練習科）	四年 二年 二年 三年	廿三人
陸軍獸醫學校（獸醫、騎砲輜重兵、蹄鐵學術）	士官學生五月 下士學生三月 卒業生九月 獸醫部士官候補生三月	二人

陸軍教導團	歩兵科	十六月	百八十四人
	騎兵科	十八月	
	砲兵科	二十月	
	工兵科	二十月	
	輜重兵科	十八月	
陸軍砲兵工科學舍（火、鞁、銃、木、鍛工科）		火工科一年　他は二年	六人
陸軍被服士長學舍（縫、靴工科）		一年六月	七人
陸軍軍樂學舍（軍樂科）		十五月	廿一人
海軍砲術學校（砲術）		五月內	十五人
海軍水雷術練習所（水雷科）		八月內	七人

普通敎育普及の度

山間僻陬の小村落と、東京の如き大都會とが、却て低度に在りて、中位の都會が最も好成績を現はせるは、普通敎育普及の度也。

是れ文部省に於て、種々の方法により徴兵撿査の際に實驗したる二個年の結果なりと云ふ。

新智識配布の狀況

新聞雜誌の配布は、或る塲合まで新智識の配布を意味す。

今各府縣の人口一に付新聞雜誌の配布違を見るに下の如し。

東京	四三、五四	神奈川	六、三〇
埼玉	一、二〇	千葉	一、五五
茨城	一、三〇	栃木	一、一〇
群馬	一、一一	長野	一、五七
山梨	一、八九	靜岡	一、〇九
愛知	〇、四七	三重	〇、五六
岐阜	〇、七二	滋賀	〇、五八
福井	〇、五七	石川	〇、五三
富山	〇、八一	新潟	〇、八九
福島	一、三〇	宮城	一、一九
山形	一、五〇	秋田	一、五八
岩手	一、三三	青森	一、六〇
京都	一、三六	大坂	二、二〇
奈良	〇、六四	和歌山	〇、六九
兵庫	〇、五九	岡山	〇、三八
廣島	〇、三二	山口	〇、七五
島根	〇、五九	鳥取	一、〇四
德島	〇、三七	香川	〇、三三
愛媛	〇、四〇	高知	〇、七八
長崎	〇、九二	佐賀	〇、七二
福岡	〇、四九	熊本	〇、六二
大分	〇、六七	宮崎	〇、九七
鹿兒島	〇、五〇	沖繩	〇、二一
北海道	二、四四	本邦在留外國人	六、七〇
外國在留本邦人	七、三一	總平均	二、八五

即ち東京第一、神奈川第二、北海道第三、大坂第四にして山梨、青森、秋田、長野、千葉、山形、岩手、茨城、福島、埼玉、宮城、群馬、栃木、靜岡、鳥取等順次之に次けり。又之を大區分すれば、關東第一、北海道東北以下順次之に次くもの丶如し。

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行